

おん
文
ん

七
月

興
行

人形浄
座

楽
留
璃

四ツ
橋

文
楽
座



定備金十五銭

なつ七月、輝やかしい季で御座りま
す。いよ／＼御清康にあらせられま
する段欣慶に存上ます。當文樂座も
開場以來六ヶ月間連日満員、劇壇未
曾有の絶對的好成績にてこゝにまた
／＼七月劇壇の覇權を握らんといた
します。なつ七月にふさはしき曲目
に巨頭連花形連を網羅してよりよき
世界的興味の第一者としての戦陣に
つきました涼艶なるわが民族藝術の
清興を満喫絶大の賛を齎らんことを
お希申上ます。

昭和五年七月

四ッ橋 文樂座

昭和五年七月一日初日

初日 午後三時開幕
二日目 午後四時開幕
三日目より 午後四時開幕

二日目よりの

・御観覧料・

一等お座席 御一名——金三圓五十錢
一等椅子席 御一名——金三圓
二等席 御一名——金一圓五十錢
三等席 御一名——金八十錢

一等お座席は五日前より
一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
専用電話 七四〇八番
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座りませんが、靴、草履
はそのまゝ御入場出来ますからなるべく
靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカトツ廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あらゆる印刷

永井日英印刷堂

大阪市西区土佐堀通一丁目

長三〇三八番
四九四〇番
四九四一番
土佐堀(44)

Vertical text on the far right edge, likely a date or publication information.

天香百華大天

Vertical text on the left side of the main header area.

Vertical text columns on the right side of the main content area.

Vertical text columns in the middle-right of the main content area.

Vertical text columns in the middle-left of the main content area.

三味線

Main body of vertical text columns in the center of the page.

Large grid of vertical text columns at the bottom of the page.

Vertical text columns on the far left edge of the page.

文樂座人形淨瑠璃

・七月興行・

七月興行 三日目 豫定時間表

山田案山子作

生寫朝顔話

明石浦船別れの段 (午後四時開幕の豫定)

御休憩時間 十分間の豫定

笑薬の段 (四時十分開幕の豫定)

宿屋の段 (五時十分開幕の豫定)

近松門左衛門作

釋迦如來誕生會

悉達太子道行の段 (六時四十分開幕の豫定)

太子雜行の段 (七時廿五分開幕の豫定)

御食事時間 二十分間の豫定

近松栗林子作

傾城反魂香

將監閑居の段 (八時二十五分開幕の豫定)

御休憩時間 十五分間の豫定

近松徳三作

伊勢音頭戀寝双

油屋の段 (九時二十五分開幕の豫定)

打出し 十時四十五分の豫定

(舞臺裝置 松田種次)





義太夫生る

文樂今昔譚より

その頃、天王寺逢阪のほそり、安居天神の山下に、さ
 くやかな畑地を耕してゐる二十歳あまりの一人の若者
 があつた、若者は頑丈な身体を毎日この畑地へ運んで
 来ては、せつせさよく働いてゐた。土地の人達はこの
 若者を五郎兵衛と呼んでゐた。五郎兵衛には、毎日同
 じやうなことを繰り返してゐるこの畑仕事の他に、實
 は人知れぬ楽しみがあつたのである。麗かな日ざしを
 浴びながら、青空を仰いで、この頃流行の淨瑠璃節を
 聲張り上げて唄つてゐる氣持はなんとも云へぬ愉快さ
 であつた。事實五郎兵衛は他の百姓の子などの眞似も
 出来ない大きな聲を以てゐて、他の者が田植歌やたい

の野良歌より歌へぬに反して、自分だけが淨瑠璃節を
 ずん／＼唸るこゝが出来るので馬鹿に嬉しかつた。
 稽古もしない五郎兵衛が、いつの間に淨瑠璃を覚え込
 んだのか、それはこの畑地が五郎兵衛に淨瑠璃を教へ
 るのに、恰ど都合よく出来てゐる。この畑地の東にあた
 る崖の上には、その頃天王寺に於ける八軒茶屋の中
 も、福屋など、並び稱されて有名な徳屋といふ料亭が
 天神山の翠巒を脊負つて、五郎兵衛の畑地を覗いてゐ
 る。その二階座敷が畑仕事をしてゐる五郎兵衛のホン
 の頭の上にあつて、こゝから五郎兵衛の好きな淨瑠璃
 が絶へず聞へてくる。最初はたいの口眞似をしてゐる

に過ぎなかつたが、日を経るに従つて淨瑠璃のおもしろ味が忘れられなくなつて來た。それもその筈で、その徳屋の二階から漏れてくる淨瑠璃といふのは、當時大阪の淨瑠璃界の霸王井上播摩掾の従弟で、播摩掾の引退をした後ち二世播摩として持て囃された井上流淨瑠璃の直傳清水理兵衛の稽古場からくる堂々たるものであつたのである。この清水理兵衛は實はこの徳屋の主人で、料理の本業の他にかうした淨瑠璃の正統を継ぎ、おまげに謡曲もやる、茶道、生花、圍碁、俳諧、なんでも御座れといふ風流人であつたから、多くの文人墨客や、門弟達もいつも出入をしてゐて、二階ではよく淨瑠璃の稽古を門弟達にしてやつてゐた。

かうした環境に日を送つてゐるのだから、五郎兵衛の淨瑠璃熱がだん／＼高まつてくるのは無理はない、追々々々楽しみから一步を進めて野心といふのに變つて來た。

「俺れだつて、遣れないことはない」

たいていのこの年頃の若者が抱くやうな空想さへ五郎兵衛は浮べてゐた。年々中田圃の中に泥足を踏み込んで、變化もない畑仕事にあぐさくするよりも男産れたかぎり、大勢の世間の人達の前で、得意の淨瑠璃を語つてヤンヤと褒められた時はどうあらう、武士のやうに肩衣を着込んで見臺の前に直つてかう身構えた心持は……なご、取止めもなくそれからそれへさ憧れの心を馳せた。

いふまでもなく、淨瑠璃大夫は、他の藝人や、又普通の町人などゝ違つて、既に太夫の稱を許され、なほその上優れた技倆をもつてゐれば九重の雲深きあたり天聽に達し官名を授けられる、誰しも志のあるものがこれを一生の志願にしたのは當然である。金平淨瑠璃で名を擧げた櫻井丹波掾の如き、最初期へ入る時一職

人、商人となつては、事により無念なる儀もあり、人に構はぬ淨瑠璃太夫然る可し」と云つてゐる。そのやうに五郎兵衛の太夫志望熱も、當時の時勢として、無理のないものであつた。

「一日も早く鍬や鋤を捨て、」

さかう自信を有つやうになつて来たある夏の日盛りの頃である。いつもの如く晝の辨當をすました五郎兵衛は、だし抜に、井上流の淨瑠璃を、聲張り上げて語り出した。

すぐ上の二階にゐた清水理兵衛の耳へこの底力のある重々しい大聲が、けうはめづらしくも響いて来た。理兵衛はちつこ耳を澄ました。それは無論五郎兵衛の語り口を聞いてゐるのではなくて、聲の出どころを聞いてゐるのである、自分の多くの門弟のうちにも、これ程調子の整つたものがない、この百姓はよほど天稟が

備つてゐるこ、そこは専門家だけに、すぐにこんな風に見出して耳を澄ましてゐるのであつた、聞いてゐるうちに「こんな立派な素質をもつてゐるものを太夫にしてやつたら」さう思つた。

理兵衛はさうく五郎兵衛を我前に呼び寄せた。二人の間答がどんなこゝであつたかは云ふ必要がない。

五郎兵衛は憧れきつた日頃の大望が成就した喜びに躍り上つた。

昨日まで鍬鋤をさつて土を掘り返へしてゐた五郎兵衛は、鍬だこの出来た手に拍子扇を持つて、名門の前に稽古を勵む身となつた。

師匠理兵衛の薫陶はいふに及ばず、時として大師匠井上播磨掾の口傳を享けて、日夜の熱心な稽古ぶりは、さなきだに天稟の素質を有つてゐる五郎兵衛をして、數年ならず、道頓堀虎屋喜太夫座の床へ送る日か來

た。即ち延寶七年、彼二十九歳、もう百姓の五郎兵衛ではなくなつて、清水理太夫といふ名に變つてゐた。この五郎兵衛こそ誰れあらう、現今、傳ふるところの淨瑠璃、即ち、義太夫節の開祖竹本義太夫その人で、今に至るまで斯道尊崇の的となつてゐる。

いつたいこの五郎兵衛が一百姓から身を興して、理太夫から義太夫となり、やがては筑後掾の官名を受領して、六十餘年の生涯を、義太夫節なる藝術にさしげて悪戦苦闘をつけた、それはそも／＼いつの頃のこゝか、私の知つてゐる限りを茲に述べねばならない。今から遡つて二百七十七年の昔、江戸では三代將軍家光公が歿し、由井正雪の陰謀が露顯したさいふ慶安四年、さういふ騒ぎさばなんの關はり合ひもない大阪の天王寺、南堀越の一農家で五郎兵衛は産れた。

(この生家は、十數年前までは葺屋葺のまゝで珍ら

しくも往昔の面影を残してゐたが、今はもう普通の民家に建て替つてゐる。場所が天王寺西門から阿倍野橋に通ずる電車路、茶臼山停留場の西側)

やう／＼に成長した五郎兵衛が、どういふ容貌の人であつたかといふさ、どうも竹本義太夫といふ名よりは百姓五郎兵衛といふ名にふさはしい顔の持主で、無論醜男の部へ入る側である、義太夫の正像として、三世竹本長門太夫の所藏であつた。烏川庵珍藏の圖を寫した應呼堂笑山の筆、それが師弟の關係からしてわが先老に譲られ今に私の家に傳來する。その像を觀るさ法体姿(法名釋道喜)で頭を圓め、眉が太く、眼は圓栗のやう、開いた口は柘榴を割つた如く、ごつちかさ云へば醜い人相の方に屬する、ここに顔の中央に異様な形をもつて、踞座してゐる鼻は、一種不可思議な發育状態を示してゐて、この鼻の爲に非常に顔全体を怖

ろしく見せてゐる。さうはいふものゝ、つくづく考へて見るこゝ、義太夫ほどの大偉業を完成したものとて、ここには餘人及ばざる豊富な音量を以てゐて、生理的にも何處かちがつた點があるに相違ない。さう思つてこの鼻を見てゐるこゝ、不撓不屈の彼れが、大精神は盤石の如くこゝに根を据えてゐるのかと思われるのである。事實義太夫の音量は、道頓堀の小屋の内の聲も向ふの濱側まで聞えたといふ記録があるのだから尋常のものではなかつたこゝを想像される。音量を生命とする義太夫節と鼻といふものゝ關係が、何か關聯があるのであるまいか。近世に於ても、呂太夫、組太夫、大隅太夫の如き大物語りの人々の鼻が著るしく立派なものであつたこゝも尙ほ記憶にあるし、豊竹呂昇の如き女性にして尙ほ普通人を遙に超越した鼻を持つてゐたこゝを覺えてゐる。

いつの頃からのこゝが知れないが、素人で義太夫節を語るものを天狗だといふ。鼻を高くする、といふこゝなので多少高慢を侮蔑した意味を含んでゐるが、いつの間にか自他共にかう稱へてしまふこゝになつてゐる。これは淨瑠璃の仲間ばかりに限らず他の諸藝に遊ぶ素人達の間にも天狗は使はれてゐるが、義太夫節はこゝに盛んではない、斯道では素人の會に自ら、天狗に因んだ杉の木會、鞍馬會、鼻高會、競鼻會など奇抜な名稱をつけた會もあつたを覺えてゐる。それほどに淨瑠璃と天狗鼻といふものが密接になつてゐるこゝを考へるこゝ、或は義太夫の魁偉なる鼻が、こゝに一種の象徴として、後世に傳はつたものではなからうか、誰れか義太夫の鼻にあやかりたいものゝ、これを傳へたのだと見るこゝは出來ないだらうか。



明石浦舟別れの段

山田案山子作
生寫朝顔話

明石の浦船別れより
宿屋、大井川まで

阿曾次郎 豊竹つばめ 野澤勝太夫
深雪 竹本南部太夫 野澤吉彌
船頭琴 竹本播路太夫 豊澤新之助

人形

宮城阿曾次郎 桐竹政龜
娘深雪 吉田文五郎
船頭大ぜい

島田驛宿屋笑薬の段

中
豊竹辰太郎 鶴澤清二太夫
竹本陸路太夫 鶴澤叶大郎

此の曲は山田案山子の戯號で近松徳叟が熊澤蕃山の作を傳へられてゐる。「露の干ね間」なる朝顔の小唄を原に想を溝え『生寫朝顔日記』と題して竹本重太夫のために書卸したのであつたが上演に致らずして文化七年八月病歿した。それを翌年近松柳が『徳叟遺稿朝顔日記』として讀本に刊行したが非常に評判になつたので天保三年耶麻田加々子と云ふ原作者に擬らばしい人が添作して、大内館、松原、宇治川、茶店、岡崎、明石船別、弓之助屋敷、大磯揚屋、

小瀬川、麻耶ヶ嶽、濱松、島田宿、駒澤閑居、山岡屋敷、多々羅濱の五冊十五段の淨瑠璃に仕組んだ。この際の外題は原作のまゝ、『生寫朝顔日記』であつたが、嘉永三年正月上演の際翠松園と云ふ人が竹本重太夫の遣子鶴澤才三、同儀左衛門等と計つて添補潤色し、外題の六文字は縁起が悪いと云ふので、『増補生寫朝顔話』と七字に改題した。それ故に今日流布してゐる正本は此の嘉永三年刊行のものが多い。この曲の筋は、秋月弓之助と云ふ九州邊の國家老の娘深雪が、京都在住中、宇治の塾師で宮城阿曾次郎と云ふ美男の若侍と契を結び歡樂の幾日かを過す中に秋月一家は急に本國に引上ぐる事となり、深雪と阿曾次郎は明石の浦で

次 豊竹駒太夫
鶴澤重造

奥座敷より大井川の段

切 豊竹古鞆太夫
鶴澤清六
琴野澤勝芳

人形

- 一、駒澤治郎左衛門 桐竹 政龜
- 一、岩代多喜太 吉田 玉幸
- 一、朝 顔 吉田文五郎
- 一、戎屋徳右衛門 吉田山兵吉
- 一、萩野祐仙 吉田扇太郎
- 一、手代松兵衛 吉田文之助
- 一、笹 久 藏 吉田 玉松
- 一、奴 關 助 吉田 玉市
- 一、下 女 お 鍋 吉田覺三郎
- 一、川 越 大 ざ い

本意ない別れを惜む。その際深雪は朝顔の唱歌を記した扇を後日の笹に阿曾次郎の船に投入して纒を解いた。其後阿曾次郎は仕官し駒澤次郎左衛門を改めて江戸へ出立する。一方歸國した深雪は男の事を忘れかれ本國を出奔して、都へ上ると男は去つたので、その行衛を追ふ中盲目となる駒澤となつた阿曾次郎は同役の岩代と共に東海道を下り、島田宿の戎屋で偶然盲目姿の深雪に邂逅したが、それと明さず出立する。後で知つた深雪は直ぐ其後を追つたが一足違ひで大井川に豪雨で川止まなつたので、失望の結果入水して果てやうとした時、戎屋の亭主と下部の關助が駈けつけて助け、戎屋の亭主は深雪が祖父の家臣と云ふ事が解り、駒澤

が恵んだ眼薬は甲子生れの人間の生血で調劑すれば癒える云ふので、甲子生れの亭主が切腹して、それが爲めに深雪の眼が開く云ふ内容でありますが名匠古鞆太夫が此度初役でこの宿屋の切をつこめます。當代の考證家で一倍研究心の燃えてゐる古鞆太夫が院本によつて熱心に苦心した舞臺です。

明石浦船別れの段 (床本)
M 和田海の浪の面に月影も明石の浦の泊り船風待つ程のつれづれを慰めかれて阿曾次郎船先に立出月かげに四方を見晴らす氣ばらしの煙草の煙吹きなびく船路の旅ものさびし傍にかゝりし大船は秋月弓之助も歸國の乗船乗人も水夫も船草臥前後も知ぬ高駒娘深雪は只一人目さへ

も合はぬ戀人を思ひこがれてうつうつと戀に心を筑紫琴せめて慰むよすがもさかきならしたる糸しらべ露のひぬ間の朝顔に照す日かげのつれなきにテ合點の行かぬアノ諷は過つき宇治の蟹狩に秋月の娘深雪が扇に、
某が書てあたへし朝顔の唱歌聲さへ深雪に生寫し、ハテいぶかしさよこ見上ぐればあなたも見下す月かげに顔はまさしく深雪殿ではないか、ヤア阿曾次郎様逢たかつたぞ我を忘れて乗移るを抱きこつて口に手を當てハテ聲が高い深雪殿思ひもよらぬ今の對面何ゆへに此所に、さればいな宇治でお別れ申てよりも片時忘れず泣きくらす内國元に騷動起り父母共に俄の旅立所詮逢事叶はぬか何ぼう悲しう思ふたに爰で逢たはつき

せぬ縁ごふぞ此身を何國へこつれて退いて賜はれさびつたりいだき月の夜の影も隔てぬ比翼鳥放れがたなき風情なり。阿曾次郎も心を察し、嬉しいそなたの志忘れは置かぬさりながらそなたを今つれ退いては某が武士道立す殊に此度伯父の頼みにて遁れぬ主用猶もつて女を同道しむたき入譯有縁ならば添時節も有ふ斯して居ては人のさがめサアちやつと元の船へ乗つてたもエ、そりや聞へませぬ阿曾次郎様添れる時節も有ふとは當座遁れの捨詞お氣に入らずば打明けて包ますそれさ言つてたべももおまへにそふ事のならぬ時には淵川へ此身を投て死ます。ふたゝび外の夫迎へせぬを誓ひし身のけつばくさらばさ斗り水底へ既に飛込ん

立ち上るを、あばて驚き抱き留、コレ待た早まるまいイエ、放して殺して下さんせ、ア、是非もなしそれ程迄思ひ詰めた娘心、見殺しにマごふせられふ不義いたづらご世の人の口をしらばそれつれて退くコレ盡未來迄女房ぞやエ、嬉しふござんす添いそんなられむひを叶へて下さんすかチ、武士の詞に二言はない去ながら此まゝにつれて退げ親達のもしや海川へも身をなげたかとお歎きあらんは定の物委しい様子を一つ筆。チ、よふいふてくださんしたわたくしもそふ思ふてゐますがごふぞ料紙をかして下さんせチ、心得しご懐紙腰をすぐつて南無三寶をなたを抱留る拍子海へ何やら落せし水音旅矢立をはめてのけたマーごうした

らよからふぞチ、それなら待て下さんせ二親はじめ伴々まで旅草臥の寝入ばなそつと元船へいんで一筆書置してきませうチ、それよからふがコレかならず物音させて親達のみも覺めぬよふ心得ましたと立上れば阿曾次郎は肩車あなたの船へ乗うつらす音に目さます船頭共チ、地嵐も吹出した碇をあげよ帆を巻げと騒ぎ出せばなふ悲しやとあせる内船は次第にさふさがるコハなにとせんかとせんとあせるはづみに阿曾次郎も船へ投込扇のわかれ後しら浪を隔ての船つなぐぬ縁ぞ是非もなき。

(床本) 笑薬の段 (前)

M 行空の雲の足より雲助が足並早き東海道傳馬人足歩荷物吸付て行たばこさへ五十三次打續く中に取分け

賑はしくおじやれが髪も嶋田の宿、所名うての内證よし名さへ戎屋徳右衛門、老舗も廣き十間口店は買札講印かけ渡したる緩籠も風にひらめき吹付ける、繁昌たぐひなかりけり、せはしき中にもおじやれ共何かな油と寄り舉りナントお鍋ごん此頃旦那さんの世話にさしやんす朝顔と言目くらアリアマア惜い器量じやないかいの併しこちの旦那様が身に引替の深切はごうやらくさいものじやぞやチ、何のいふ何ぼこま付ても提灯で餅埒の明かぬ事ぢやばいのや夫ればそふとお泊りの侍様一人のお方は意地の悪そふな顔付モ一人のお方はア、能い男じやわしやアノお侍様には眞からそこらほの字とチホ、れの字お茶よたばこ盆よと氣

を付て持て幾度持前の貝焼すへ膳したさじやにそしらぬ顔の其しんきさはほんのあわびの貝の片思ひノウ小よしどの何とそふではないかいのさ一つに寄るご男沙汰下女の習ひぞかしましきのれん押上手代の松兵衛立出てヨット聞たぞん、コリヤお鍋其様に廻り遠ひすへ膳よりちよつと手をかしや、アレ又松兵衛殿いやらしいそんな事はこちやきらいじやわいの何じやきらいじや其又きらいな者が貝やきじやの鮑の貝の片思ひのさなぞいふたそれのみならず親方の悪口までアノ朝顔に氣が有はのイヤ提灯で餅じやのさ口から出次第よふ言ふたな旦那へ此通り告るぞよ、ア、コレめつそふな松兵衛殿そんな事告てよいものかいのふイヤ、告

る／＼皆てこますぞか何よそこ物も相談じやイヤコレお鍋旦那へ告るがいやならば松兵衛山の松茸も其片思ひの鮑さを焚出しにしてくれるなら何もかも沙汰なしにすますぞふじやん／＼こしなだるれば勝手口より徳右衛門此体見るより立出てチーコリヤ女子供又しても／＼小影へよるこわつけもない松兵衛も嗜め／＼や、それはそふも朝顔はまだ来ぬそふな來たらばちよつこしらしやイヤナニ松兵衛奥のお客様は大内様の御家中明七ツのお立なれば家具も取かへ手廻し仕ておきや女子供も合點かドリヤ奥へいて窺ふ松兵衛おじや徳右衛門人を遣へば後先に心を奥の座敷へそ手代引連れ入りにけり。かゝる折ふし奥の間より立出る萩の祐仙イヤ

コレ女中奥のお客は武家方そふな印の紋は大内桐定めて山口の家中衆ならん名は何も言ますぞハイたしか大内の御近習駒澤様今お一人は岩代様とやら聞きましたム、成程そふで有ふイヤ大儀ながらこなた衆は奥へいて岩代様に萩の祐仙と申者チト内々に御目にかゝりたひも言てくれまいか、ハイ／＼それはお安い御用ドレ呼まして上ませふと二人は立て入にけり。斯き知らせに岩代多喜太一間の内より立出れば夫と見るより頭を下コレハ／＼岩代様先づもつて御健勝で、チーコリヤ珍らしい萩の祐仙某に逢たいとハいか成事をサレバ／＼先達ての御状には新参の駒澤諫言にて殿には御本心になられ運入殿の最期のよし則ち玄蕃様より此御

状と渡せば受取一見しチ、大儀／＼身共さて何かに付て邪冤に成は駒澤め何卒密に害せんさきのふ街道にて笹久藏さいへる浪人を連歸り委細の工み申付早速奥の下家へ忍ばせ置たやそれは味し／＼か、もしも其手でいかぬ時には下拙む手製のコレ此しびれ薬薄茶にませて吞す時は一夜の間は死人同全ム、夫れこそ、幸、屈竟併し小しやく者の駒澤め心見なくては食ふまいヲツト其氣遣ひは無用々々コレ此丸薬は則下薬は先へ吞置けば少しも酔はざる大妙薬時に岩代様申さぬ事は聞へませぬか首尾よふ参れば御褒美をづ／＼しりさいたゞきさふ御座りますわいチーサ／＼夫れにぬかりか有物が事成就の其上はいつかざの褒美なれ共是は先づ當座

の印と懐中より金一包差出せば押いたゞきコレハ忝いして駒澤めは何れの間にチーサかれは先刻公用につき村役人方へうせたればナソレ此間に件の妙薬某は奥の間にて山崎殿へ書面をしたゝめん其方も手つがひ致して後より來やれ祐仙と詞つこふて立上り岸に曲れる岩代は一問へ

(床本) 笑薬の段 (奥)

M 後に祐仙獨り笑味ひぞん富座の褒美が先拾兩さらば是から薬のしかけと言ひつゝ傍り見廻して件の薬を湯の中へそつこほり込蓋びつしやり斯して置いて駒澤が戻り次第にふり立て我等が先へ腹加減解薬の力できらしん駒澤めは忽にぐにやぐにぐと薬の功能こいつはよつ程いゝ味いばぐと悦び勇む

其處へ奥よりいきせき下女お鍋申せり立る聲に拘り祐仙はそしらぬ顔でエヘン奥へ入る始終窺ふ徳右衛門そつこ立出後打なむめ最前から聞て居れば何やら怪しいアノ薬駒澤様へ申上ふかイヤノ夫れでは却て當り障りハアごふそよい思案が有そふなものやチーソレヨ昨日松原で買て置た笑ひ薬此湯をかへてチーそふじやん斯して置てまさかの時はチツトよしと心でうなづき徳右衛門勝手へこそば入にけり。早夕暮のいそがしく膳部の運び癡道具を間毎ぐに燈す灯のきらをかさりて駒澤治郎左衛門春高旅中ながらも武士の行儀くづさぬ羽織野袴家來引連立歸る。待もうけたる岩代多喜太一間の

内よりのさばり出ヤコレハ駒澤氏お早いお歸りシテ要用は相濟みましたかいかにも殿様御歸國先觸れの手筈庄屋代官に申付思はぬ障入嗚お待兼ねナンノ旅くたびれもおいさひなく宿々のかけ引イヤモ御苦勞に存じます。エ拙者も何かなぞ存する所へ國元にて呪懇の醫者秋の祐仙と申もの當宿に泊り合せ先刻斗らす對面致せしにこやつ殊の外茶好みにて道中にて茶箱を持參し相樂しおおるこの事實殿にもお好きの道何ぞ一腹呑ておやり下されまいかやそれは風流なる心おけし我も人も旅草臥所望致すも何んやらテ扱いらぬ御遠慮薄茶一腹所望致せばさて彼も好の道でござれば何の草臥をいさひませふひらに一腹おつき合下され

いとおのち工みの押付薬無理にすゝ
むる其内に時分はよしと萩の祐仙茶
箱携へ心に笑みわざさゝばけて手な
つかへ、コレハコレハ岩代様先程は誠
に失禮してあなた様はチ、サ其節お
噂申した駒澤氏イヤモ文學武藝は云
ふに及ばず何一つ抜目はなければ生
付御遠慮深いお人され共元より茶の
道には御熱心ヤ幸是に湯もたぎり
有ナソレ薄茶一腹サ所望だコレハハ
コレハ中々あなた方へ上ます様
な茶ではござりませれど御所望とは
身の面目苦しからずば何腹成さ召上
られ下されふと追従たらコレハ上り
茶箱取出し毒薬の工みの裏流かゝれ
し共しらぬ手前のしかつべらしく振
立て差出せば岩代は詞を正しイヤ駒
澤氏お取次所へヤレ先々暫くご徳右

衛門恐れながら座敷に出障りな
ら目那樣もいかはし申事ながら
譜代お出入りの殿様の御家來たるあ
なた方私方では煮焚のものに此度
限らず吟味に吟味を致した上差上ま
せれば千に一つ鷹相がござりまして
は此徳右衛門めが越度泊り合したあ
なたのお茶サ御如才の有ふ様はなけ
れ共めつたにはナ申目顔で知せば
岩代多喜太ヤアいらざるうぬがさし
出身が入魂の萩の祐仙茶に毒薬でも
仕込有りご疑ふての申條かアイヤ
全く左様ではござりませれども、然
らば何故差留た駒澤殿の手前云ひ
サ今一言言つて見よ眞二つに打放す
さきつば廻せば祐仙押留アイヤ先
々お待下されませエ、貴公様の御立
腹は御尤なれど徳右衛門の申所も

また一理有ヤ斯致そ下拙が毒見仕り
其上にて駒澤様へさし上ませふ何ご
徳右衛門それで言分は有まいなイヤ
モ御自分にお毒見なざる程慥な事
はござりませぬチ、そふ有ふくわ
其替り何事もない時は其分では濟さ
ぬが合點じやのヤモ夫れは是非に及
びませぬ御存分に成ませふム、ム、
い、ヤ面白くきつと詞をつかふ
たぞよドレ毒味を茶碗取上そつと
解毒を先へ吞さあらぬ体にて件の薄
茶零も残さず吞下して徳右衛門ちよ
つあれハサ見たか徳右衛門此通りじ
やサ是でも別條が有か徳右衛門ごふ
だハイヤモ私こそ、眞平御免下さ
りませふ何じや御免下さりませふ
くも氣が強いはいヤイ徳右衛門戎
屋徳右衛門サマゑび徳奴サ約束じや

げさそれ共得言すむしやくしや腹席
を蹴立て廊下口後に心を奥の間の我
座敷へさ駒澤も座を立てこそ入にけ
る。

(床本) 宿屋の段より大井

川の段まで

M 何國にも、暫しは旅さ綴りけん
昔の人の筆の跡、徒然侘ぶる假の宿
夜の襖の透洩りて、風に瞬く燈火の
影も淋しき奥の間へ、立歸る治郎左
衛門。何心なく座を占めて、不圖目
に付く衝立の、張交の歌讀下し。詞
テ心得ぬ、此の貼交の地紙の歌は
先年山城の宇治にて、秋月が娘深雪
も扇に某む、又逢ふまでの筈にさ、
書いて與へし朝顔の歌。其後圖らず
明石にて、船繋りせし其砌、琴に合
はして深雪が節付け、折節思はぬ互

の出船、飽かぬ別れを悲しみて、女
の手づから、我船へ投込みし此扇
然るに今又此家にて、思はずも此張
交、ア何者の諷ひ傳へて、はから
す東の驛路に、見るも不思議さ獨言
其折からの忍ばれて、詠め入つたる
時しも有れ。襖押開け徳右衛門、小
腰屈めて入り來れば、此方も扇押隠
し。詞「亭主、先刻は扱々きつい
働き、危き難を遁れしも、全く其方
が志、サ、是へく。ハ、冥加に
餘る御言葉、エ、最前此方へ參る砌
何か三人密々話、合點行かす忍び
聞けば、瘋痺薬を茶に交て、彼方様
へ差上げんその、ア、コリヤ、サア
マ恐ろしい巧み、エ、憎さも憎し、
直に申上げうまは存じたれど、夫で
はどの様な科人が出來うも知れぬさ

存じ、へ、幸ひ先日慰みに求めまし
た笑ひ藥、ヤコレ幸ひも、痺れ藥さ
取替へたを、知らずに呑んだ先刻の
時宜、此後さても旦那様、御油斷は
成ませぬぞへ。ホ、其儀は、某も疾
く承知致した、マ夫は格別、此衝立
にある朝顔の唱歌は、何人の手跡、
何いふことから御身の手に入りしぞ
エ、夫でござりますが、其歌につい
てマ哀れな話。エ、元は中國邊屋々
の娘さうなむ、何やら尋れる人む有
るこて、親元を家出し、夫より方々
と流浪の上、果はさうく目を泣潰
し、跡の目までは濱松邊に、其歌を
歌ふて袖乞ひ、所に又國元から、所
縁の女子が尋れて來て逢ひました、
が其女も程無う病死、夫から又獨ほ
し、此邊まで其歌を歌ふて歩きまし

たが、何が盲目でこそあれ、器量ば
 良し、聲は上し見る程の者かいちら
 しかり、朝顔々々と言ふて、其歌を
 知らぬ者はござりませぬ。私もあま
 りの不慥さに、此宿に足を止めさせ
 今では宿屋宿屋の御客の伽、何さま
 ア不仕合せな者も有るものでござり
 ますと、涙片手の物語も、心に絆々
 應ゆる胸澤、若し言交せし我妻かこ
 轟く胸を押鎮め。詞ム、夫は扱哀れ
 な話、身も今宵は何さやら物淋しい
 鬱散の爲其女を、呼寄する事はなる
 まいか。イヤモ何扱て易い事、只
 今呼びに遣はしましよ、御慰みに琴
 か三味。ム、何分宜きに頼み入るこ
 云ふは仔細の有るぞとも、知らぬ佛
 氣徳右衛門、尻輕にこそ立つて行く
 跡へ相役岩代多喜太、のさく座

に直り。詞ヤア駒澤氏、嘸御退屈で
 ござらう。コレハ、岩代氏、殊の
 外お早い事でござるこ、上へは解け
 ても解けやらぬ、前垂掛けの下女お
 鍋、次の間に手を仕へ、詞申しく
 只今朝顔殿が見えました、是へ通し
 ましよかいな。ナニ朝顔さほそりや
 何者だ。アイヤ、此道中で琴三味を
 弾き、旅の徒然を慰さむる賢女さや
 ら、拙者も何か物淋しうござれば、
 ちと琴でも聞かふぞ存じ、亭主を頼
 み呼寄せましてござる。アイヤ夫や
 止めにされい。トハ又何故な。サレ
 バサ、先刻身共か知音たる秋野祐仙
 同席如何さ云はれた貴殿、乞食をば
 座敷へは通されまいかい。ハテ高の
 知れた盲目女、萬更怪しい、ナソレ
 茶箱も持參致すまいと、しつべい返

しにぎつくりと、言句に詰れば滅す
 口。詞ア左程御所望ならば兎も角
 も、併し座敷へは叶はぬ、庭へ呼出
 し、琴なご三味なご、彈かし召され
 て、早く此場を追返されよと、飽ま
 で意地持つ執拗者、寄らす障らす駒
 澤が、差圖にお鍋は心得て。詞朝顔
 殿召しまする、朝顔殿々々々呼立
 つる。むざんなるかな秋月の、娘深
 雪は身に積る、歎きの數の重りて、
 城失ふ目無鳥。杖柱も頼みてし
 淺香は脆く朝露と、消残りたる身一
 つを、遠に捨ても縁先の、飛石探る
 足元も、危なき木曾の丸木橋、渡り
 苦しき風情にて、漸々座して手を仕
 へ。詞召しましたは此お座敷でござ
 りますか、拙い調も御笑ひ種、おは
 もじ様やご會釋する、顔も深雪の成

れの果。不惑の者や急り来る、涙
吞込みひかへ居る。岩代は夫さも知
らす。詞ヤア見苦しい其形で、我々
が目通りへうせせば、ム、聞及んだ
朝顔めな、エ、きりく立つて失せ
居らう。アイヤく岩代氏、さうも
ぎごうに仰せられな、此方に呼寄せ
たればこそ、思ひ掛のう、アイヤ思
ひ掛け無う来た者を、叱るは武士の
情に非ず。コリヤく女大儀なが
ら其朝顔さやらの歌、サ、早う歌ふ
て聞かせいぞ、望む心は千萬無量、
知らぬ岩代頼服し。詞扱々駒澤氏に
は、イヤモ強い御熱心だはい。コリ
ヤく盲女、何なりとも、エ、歌へ
く、サ、早くく、ハイく、ハイ
歌ひまするのでござりますと、焦る、
夫の在るぞとも、知らぬ盲の探り手

に、戀故心盡し琴。誰かは憂きを斗
爲吟の、絲より細き指先に、指爪さ
へも八ッ橋の、寒れ果てたる身を啣
ち、涙に曇る爪調べ。ウタ露の干ぬ
間の朝顔を、合照す日かげの難面き
に、合哀れ一むら雨の、はらくさ
降れかし。詞ム、夫を慕ふ音律の、
我々の身にも思ひ遣られて、思はず
感涙致した、のう岩代殿。如何様、
琴を謂ひ器量と謂ひ、イヤモ中く
感心仕る、てイヤナニ朝顔さやら
そこは定めて冷えるであらう、身ご
もが傍で今一曲、サアく所望だ
く、ア、イヤく岩代殿、最う許
して御遣りなさい。去さては駒澤
氏、身共の望みを止めさつしやるは
ソリヤ意地の悪いと申すもの。イヤ
さうではござられど、彼女も定めて

疲れませうと存じて。ハ、アヤ然ら
ば曲は止めにして、コリヤく女
汝もはらからの非人でもあるまい、
身の上話も亦一興、話して聞かせヨ
如何だい。ハイく能う問うて
下さります、お言葉にあまへお話し
申すも耻しなむら、元私は中國生れ
様子あつて上方住居、すぎし卯月の
中空に、都の辰巳宇治の船、こわれ
よるべの螢狩に思ひそめたる戀人さ
語らふ間さへ夏の夜の、短い契りの
本意ない別れ、所尋ぬる便りさへ、
思ふに任せぬ國の迎ひ。詞親々に誘
はれ浪花の浦を船出して、身を盡し
たる憂思ひ、泣いて明石の風待に、
偶々逢ひは逢ひながら、つれなき嵐
に吹分けられ、國に歸れば父母の、
詞思ひも寄らぬ夫定め、立る操を破

らじと、屋敷を抜けて數々の、憂目を凌ぎ都路へ、上つて聞けば其人は東の旅も聞く悲しき。又も都を迷ひ出で、何時かは巡り逢坂の、關路をあまに近江路や、美濃尾張さへ定めなく、戀しく目に泣き潰し、物の文色も水鳥の、陸にさまふ悲しさは、何の世如何なる報にて、重々の歎きの數、憐れみ給へさばかりにて、聲を忍びて歎きける。詞テ悲哀れな話、併し男日早も無い世界に、マ氣の狭い女だな、イヤもうしゆんだ話で氣が滅入つた、寢酒でも食へ氣を晴さう、イヤナニ女、暇を呉る立歸れ。ハイ、有難うござります左様なれば御客様、最う御暇申します。オ、朝顔さやら大儀であつた、初めて聞いた身の上話、若し其夫が

聞くらば、無満足に思ふで有る。ノウ岩代殿。左様々々。ハ、ア是はマア御親切なお言葉、有難う存じます。杖探り取り立ちながら、虫が知らずか何さやら、耳に残りし情の詞、名残惜しさに泣くくも、心はあまに探り行く。折節奥より若侍、最早餘程深更に及び候、御兩所もに早やお休み。如何様、明日は正七ツの出立、イザ駒澤氏お休みなされぬか。イヤ拙者は今暫し用事もござれば、御構ひなく御先へ。左様なれば御先へ臥せらう、ドリヤム、イヤ御免下されさ、立上りしむ、胸に一物、心をあまに奥の間へ、伴はれてぞ入りにける。行く間遅し駒澤手を鳴らして女を呼び。詞ア、コリヤ、徳右衛門に急々對面したし、

呼んでくりやれと云ひつけやり。旅硯の墨摺流し、以前の扇開いて、何か書つけ用意の金子、薬の包。取認める目の先へ疊を貫く白及の切先、氣轉の駒澤有合ぬく刀にそ、けば下には血汐さ心得てしてやつたりと疊、勿上現れ出る筈久藏、駒澤覺悟き切付る、又を恐れぬきせるのあしらひ廊下傳ひに來かゝる亭主コハ何事ぞ窺ふ内苦もなく刀打落し後なり切るなりきたんの拍子首は遙に飛散つたり。ヤレ連れお手の内ア、コリヤムハ、イヤ出來ましたイヤ申且那樣一体此奴は何者でござります、ホ、ウ、某を欺討にせんぞ飛で火に入る夏の虫ハ、死骸はよきに頼み入。ハ、お氣遣なされませぬ。シテ只今召しましたは何の御用で御座ります

オ、徳右衛門、折入つて頼み度きは先刻の朝顔と云ふ女、今一應呼び寄せて給るまいか。ハイ畏まりましたござりませんが、彼女は直ぐに清水に申す方へ参りました、御用事ならば呼びには遣はしませうか。マ、ごうで今夜のお間には。ム、ハテ残念至極身は正七ツの立立、マ能々縁の。エ、何んぞ御意なされます。アイヤナニ徳右衛門、今の女に謝禮の爲、此三品を其方に確りと預け置く間、朝顔が参らば渡して呉りやれ。ハイ、オ、コリヤマア、夥しいお金其上結構な女扇、お薬までも。オ、サ、其薬は大明國秘法の見薬、甲子の年に出生せし、男子の生血を取つて服すれば、如何なる眼病も即座に平癒、朝顔に渡して呉りやれ。コ

レハ、何から何まで、お心を籠められた下され物、参り次第相渡し、ハイエ、悦びますでござりましよ、受取る折しも時計の七ツ詞ム、アリヤ最う七ツの刻限、數ふる内に岩代多喜太、装束改め旅立、同勢引連れ立出で。詞イザ駒澤氏、立立仕らうと、勸むる言葉に治郎左衛門、衣紋繕ひ立出づれば、見送る亭主が暇乞ひ、心そぐはぬ駒澤岩代、打連れてこそ出で、行く。跡見送つて徳右衛門。詞ハ、同じ侍でも黒白の違ひ、意地くれ悪い岩代に引替へ、情深い駒澤殿、ア、天晴れの侍じやなヤ。夫はさうさ、朝顔に、今夜の禮にはそぐはぬ下され物、ハア何ぞ様子の有りそな事と、思案の折から、深雪は何か氣

に掛り、座敷しまふてうとく、又立返る切戸の内。徳右衛門目早に見て。詞オ、朝顔か、遅かつた。宵の御客様が最う一度呼びに遣つてくれいと仰しやつたれど、清水へ往つたさ聞いた故、お断り申したれば、今の先お立ちなされた。併しマア悦びや、大枚のお金と扇、又結構な目薬、我身に遣つて呉れいと、コレお預けなされたわいの。是ばマア、冥加に餘る事、ハお禮申さいで残り多いが、申し申し且那樣、此扇に何ぞ書いてはござりませぬか、はいかりながらちつと見て下さりませ。オ、ドレ、エ、金地に一輪朝顔ア露の干の間が書いてあるツヤ、裏に宮城阿曾次郎事駒澤治郎左衛門と書いてあるぞや。エ、アノ宮城阿

曾次郎事、駒澤治郎左衛門と其扇に
 オイノ。エ、ハ、アはつさげかりに
 俄の仰天。詞知らなんだ、知らなん
 だ、知らなんだわいな、道理で能う
 似た聲と思ふたが、そんなら矢つ張
 阿曾次郎様で有つたかいの、申し申
 し旦那様、其お客様は何時お立ちな
 されたへ。オ、今の先の事じやが、
 我身は又お馴染か。馴染所か、年月
 尋ぬる夫でござんするわいな、斯う
 云ふ内も心が急ぐ、追付いて只つた
 一言。と、行かんぞするを引止め。
 詞ア、コレコレマア、待ちや
 く、エ、折悪う雨も降出し、此暗
 いに一人は危い。くイエくイエ
 假令死んでも厭ひはせぬ。ササ、
 夫ばさうでも盲の身で危い。イ
 ヤく放してく、と、突退け勿退け

杖を力に降る雨も、合いつかな厭は
 れ女の念力、跡を慕ふて。三重追ふ
 て行く。名に高き、街道一の大井川
 篠を亂して降るために、打交り鳴る
 ばた、神、漲り落つる水音は、物凄
 くも又すさまじき。夫を慕ふ念力に
 道の難所も見えぬ目も、厭はぬ深雪
 が倒つ轉びつ、漸々爰に川の傍。詞
 ノウ川越達、駒澤治郎左衛門様と云
 ふ御侍、最う川をお越しなされたか
 未か、聞かしてく、と、云ふ聞さへ
 も息切れの、聲に川越口々に。詞オ
 其侍は今の先渡つたが、俄の大
 水で川は止つた、笑止笑止とばかり
 にて、皆散々に行過ぐる。詞ナアナ
 ニ川が止つた。ハ、ア、悲しやと張
 詰めし、力も落ちて伏轉び、前後不
 覺に泣きけるが、又起き上がつて見

えぬ目に、空を睨んで。詞天道様、
 エ、聞えませぬく、わいな。此
 年月の艱難辛苦も、何卒最一度其人
 に、逢はしてだべと片時も、祈らぬ
 間さては無い者を、今日に限つて此
 大雨、川止さばく、エ、何事ぞい
 の、思へば此身は先の世で、如何な
 る事の罪せしぞ、扱も扱も味氣無や
 魚れくた其人に、逢ふても知らぬ
 盲目の、此目は如何なる悪業ぞや、
 夫の跡を戀慕ひ、石になつたる松浦
 鴻、中領振山の悲しみも、身に比べ
 ては數ならず、三千世界を尋れても
 こんな因果が又と世に、有るべきか
 はと口説き立て、拳を握り身を震ば
 し、流涕焦れ歎きしは、餘所の見
 目も哀れなり。ヤ、有つて起直り。
 詞オ、さうじやく、とても添はれ

ぬ身の因業、此川水の増さりしは、
所詮死れこの事なるべし、未來で添
ふを樂に、爰を三途の川と定め、弘
誓の船に法の道、急がし物と泣く泣
くも、合志を戀し小石の敷、袖や袂
に拾ひ込み、南無阿彌陀佛の聲諸共
既に飛ばんす其所へ。ヤレお待ちな
され深雪様、と聲にびつくりけしこ
む内。駈け来る關助、徳右衛門、斯
くも見るより抱き留め。詞マア、
御待ちなされませ。イヤ、誰かは
知られど、放して。マア、待
つしやれ朝顔殿、コレ關助殿とやら
が見えたぞや。ハ、ア下郎めてござ
ります、まづ、氣をお靜めなされ
ませと、無理に手を取り抱退くれば
詞、さう云ふ聲は關助か。遅かつ
たく、わいの、此年月艱難して

尋ねられた阿曾次郎様に、折角逢ふ
たに言の悲しさ、夫とも知らず別れ
たれど、何うやらお聲が氣に掛り、
戻つて聞けばやつぱり其人、おのれ
やれ追付かふと、跡追ふて來れば此
川留、關助如何せうぞいのう、
。オ、お道理だ、御尤
で御座居ます、何も拙者めも貴女様
の御行衛を尋ね廻る内、一昨日の夜
の夢に淺香殿に逢ひ、即ち貴女様は
島田の宿、戎屋徳右衛門方にござる
と、云はしやると思へば目も覺め、
シヤ何でも不思議と、夜を日に繼い
で參つた甲斐有つて、既に事に危
い所を、ヤレ、嬉しや、
ハ、イヤモ下郎めもお目に掛る
上は、お氣遣ひなされますな、駒澤
様にお添はせ申す、併し淺香殿は、

坂東順禮となつて、東海道へ尋ねて
見える筈、お逢ひなされましたか
な。サレバ、其淺香に跡の月、濱
松で廻り逢ふたが、其夜悪者に出逢
ひ、數ヶ所の手紙、死ぬる今端に私
を呼び、中山の邊には私が生みの親
古部三郎兵衛と云ふ人あり、此守り
刀を證據に尋ね行き、秋月弓之助が
娘と名乗つて、逢へと云ふ教へ、可
哀や終に死にやつたわいの。ム、ス
リヤ淺香殿には最後とや。ホイ、は
つとばかり驚く内、始終閉居る徳
右衛門。詞、ム、そんなら御前は、秋
月弓之助様の御息女様、又淺香と云
ふは我娘であつたか、ム、心に點
き件の短刀扱手も見せず、腹へぐつ
と突立れば、コハ何事と驚く兩人。
お、御不審は尤だが、先づ、一

通り聞てたべ、ハア私事は其お尋ねなざる、古部三郎兵衛と申す者、即ち貴女様の祖父、秋月兵部様には三代相恩、若氣の誤り、奥女中と忍び合ひ、お手討になる所を、弓之助様に助けられ、女諸共國を立退き産落せしは女の子、貧苦の中に育つる中、二つの年に母は病死、男の手で育てもならず、伯母の方へ此短刀を添へて養子に遣りしむ、廻りくつて思はずも、親む命を助けられし、秋月様へ御奉公、死んでも忠義を忘れず、この親を導きをつたか、オ

の薬に調合し、早く彼方へ、サ、早くく。實にもご關助用意の水呑取出だし、手負の血汐受留めく。泣入る深雪が懐の、妙薬取出し差寄すれば。深雪受取り、我夫の情に餘る賜物さ、押戴きく、只一口に呑み干せば、不思議や忽ち兩眼開き、ありく傍りの見え透くにぞ、深雪が嬉しさ關助も、悦び合ふぞ道理なる。詞ア、嬉しや、最早此世に望みなし、何れも去らば去らばご刀引廻し、笛の緒を刳切つて、名のみ流る大井川、水の泡さぞなりにける。跡や骸に取り纏り、わつさばかりに泣く涙、露の干ぬ間の朝顔も、合開きし此目は盲龜の浮木儼曇華の、花に勝りし夫の賜物、二つには我故此世に亡き人かま、取りつき歎く後よ

り思いわけなく萩野祐仙、深雪やらぬご取付を、首筋擱んでかつぎ上、川へさんぶさ水けむり。早や明渡る鶏の聲、山田の恵み彌勝り、茂れる朝顔物語、末の世までも著るし。



檀特山道行の段

近松門左衛門作

釋迦如來誕生會

悉達太子道行の段
太子難行の段

床本 檀特山道行の段

會者定離愛別離苦の、こころわりも分

かて輪廻の宮の中、宮も葦屋もおし

なべて、假のやごりをいつまでもこ

五濁に迷ふ、うたかたの轉迷を導き

て、忝なくも悉達太子十善王位を

振捨て、王宮を忍び出で給ふ。御慈

悲心ぞ有難き、實に宵までは錦の褥

王の床、思へば夢のたのしみさ、の

がれ行方は、法の道、韃呢胸の諸手

綱、車匿舍人は御供を、うつゝこも

いさ白雲の、山また山に埋もれて、

暮ぬ日影や夕陽山、訶羅陀の池に駒

こめて、つくづく、こ物を案するに、
無爲の故郷を離れ出で何を頼まん婆
婆世界、法の教にあらずんば、苦界

竹本 鍛太夫

竹本 文字太夫

竹本 町太夫

竹本 源路太夫

竹本 龜久太夫

豊澤 新左衛門

豊澤 仙糸

豊澤 猿糸

竹澤 團六

野澤 歌助

野澤 勝平

鶴澤 綱右衛門

豊澤 猿太郎

鶴澤 友衛門

この淨瑠璃は元禄八年四月八日初日の竹本座に書下されたもので作者は近松門左衛門。第一段摩耶夫人懐胎より悉達太子誕生迄、第二段太子の出家、第三段太子檀特山道行、第四段難行苦行、開悟、出山説教、第五段入涅槃を叙したものであります。この度上場いたしましたのは太子道行と難行の段で道行は、鍛太夫が語り難行の段は土佐太夫が独自の藝域を開いて語ります。

鶴澤 叶

人形

悉多太子 吉田榮三
車匿童子 桐竹政龜

悉多太子難行の段

切 竹本土佐太夫

野澤 吉兵衛
鶴澤 友寛
鶴澤 吉友
鶴澤 吉友
鶴澤 吉友
鶴澤 吉友

人形

一 悉多太子 吉田榮三
後二釋迦如來 吉田榮三
一 鳥陀夷 吉田玉七
一 阿羅々仙人 吉田玉次郎
一 耶輸陀羅女 桐竹紋十郎

に沈みし衆上は、さていつか生死を
出小舟、乗りおかれては、誰か渡さ
ん、立ち上る春の霞の幾七重、また
十重廿重千重百重、今日に近きこす
ゑ、も時の間に、萬里の餘所に隔
たれば、今朝も千歳の昔ぞや、我が
王宮はいづくぞと振り返り、御涙に
くれ給へば車匿も共に涙に沈み、か
くまで世の中を思召し切りし上にさ
へ、恩愛妹脊の御名残御衣を濕す御
涙ましてや残る人々の、御歎はいか
ばかり、先づ此度は還御もや御馬
の口を引返す、いやこよ車匿、欣
求大法の修行には戀しき人もあらざ
れば、何に名残の惜しからん歎きて
も、父大王を始め參らせ、あやし
の賤のすさみまであだの火宅の樂み
を、知らで過ぎなんあはれさに、止
め兼ねたる涙ぞと、重れて絞る袖の
雨、一村雨にしばしこてかつく袖笠
脇笠や、森の雫に染めなして同じ縁
の苔衣、霞を經に霧の緯の絲筋おり
かけて月をさらすかささらさ
らに、人音塵霧山、雪山蘇摩山靈鷲山
峯を越え谷におり、一千三百五十餘
里迷へば逢かに隔つれど、思へば近
き悟の道檀特山にぞ着き給ふ、悉達
太子御馬を乗放し、あら面白の山水
や、峯に戒定惠の稍をならべ、谷に
は常樂我淨の川波にかゝれる橋は西
東、彼岸此岸の柳のかみは長く亂る
れど、南枝北枝の梅の花、開くる法

の我が師はこれ、住むべき山はこゝなるぞ、汝は歸れこ宣へば車匿承り思ひよらすの仰や、候假の御遊の御幸にも御供は離れ参せず、人跡絶えたる山中に捨置き歸りあすよりは、御太子も若君も誰をかさして宮仕へ、御顔ばせも拜すべきいかなる深山の奥までも、只御供さばかりにて聲も、惜ます泣きぬたり、悉達太子も憐みの御涙を浮べ給ひ、やさしき今の涙やな、去りなむら、是を別と悲しまば妻子珍寶及王位、親しき友もしたかはす土となり灰となる、無常の別ればいかせん。我成道して主従の縁つきず、不退の友さなるべきぞ、あゝ此の駒よ此の駒よ汝は

法の道しるべ搥れし鞭のかけ迄も、一佛乗の縁ぞかし未來を伴ふしるしぞと、王の冠石の帶御衣諸共に脱ぎかけて、名残りは盡きずこ宣まへば畜類ながら聞きわけて頭をうなだれ耳を伏せ御足に舌をつけ黄なる涙を流せしは目も當てられづ哀れなり、あれ御覽せよ畜類さても心あり賤しき下臍の身なりとも、いかでか見捨て奉らん、こ又さめざめ泣きければ、愚の者の云ひここや、獨生れてひこり死す、誰をか友と云はま水とくく歸れこ宣へば、ひこり入らせ給ひては衆生濟度の結縁は何ぞ、出で入る月の光こそ我が無始無終の伴侶よ、いや月には友もなきぞこよ

衆生を照らさば月は友、曇る衆生は扱ていかに、曇らば曇れ其のまゝに月は昔の友なれや、いはじや聞かじむつしかや、本来出づべき家なれば山さて入るべき山もなし是ぞしめしの御詞そばだつ巖踏み分けて猶山深く入り給ふ、車匿は主の御別れ止めかれたる憂き涙、伏し洗み伏し洗み鞋脱駒も諸共に、諸膝折りて身慄ひし三度嘶き行きなづみ見返り、見送る主従の、山路の名残ぞ哀れなる別れ別れに成りにけり。

切 太子難行の段

風破窓を射て燈火消安く月疎屋を穿て夢成難し秋の夜すがら物凄まじき山影に岩木を友と墨衣鷲の御山の峨

々こそびへ雪山の雪嶺に満心もすみて頼もしき御悼はしや悉達太子御法の爲に御身を捨檀特山の山籠り瑠璃の御髪そりこぼし御名を墨曇沙彌ご改め阿羅々仙人の御弟子ご成師を尊みの宮仕へ難行苦行こけ衣裾を結んで肩に掛肩を結んで裾野の澤の菜摘み水汲谷に下り喚しき峰に上りては薪を樵せ給ひつゝ三伏の墨き日も座しては足を伸べ給はず私の夜の長きにも一日に胡麻一粒供御さて聞召されず冬の夜は寒しと申せども衣を重ね給はれば御肌をさし通す風は劔の如くにてやつればてさせ給ひける。

御有様ぞ殊勝なり同じ哀は耶輸陀羅女烏陀夷一人を力にてさかしき嶺々

谷々を尋れ迷ひ給へ共問べき人の跡もなく疲れ果たる岨傳ひ谷を隔て岩かげに人こそ見へしは山賊かこ烏陀夷は聲を張上てノウ物問はん淨飯大王の御太子世を遁れ給ふ御山住何處の程ぞ教へてたべノウくご有りれば耶輸陀羅女も延上りごぶぞ教へてくごさけび賜ひし御聲は谷を隔てし谷の風谷の嵐の吹連てよその梢も嘆くべし。太子は夫ご聞き召しおもひ離れし御身にも遠恩愛不能斷飛立つ斗りふり返らんご仕賜ひしがアゝ無明の惡魔我心を誰かすなかなやな愚かやな笛に寄る鹿火に入る虫愛慾故に苦しむる我百敷に在りし時は太子ごも言はゞいへ身は墨染の山烏羅

墨曇沙彌には妻子もなし園に植えては花紅葉深山にあれば柴薪暇も惜しや少時しもご柴荷かたげて下露を打ばらひく猶山深くぞ入賜ふ後は遙かに見賜ひてなうあれこそ御太子有しに替る御姿綾や錦の花の袖墨には誰が染ぬるぞ風にもあてぬ大事の御身重き薪を肩に置きそもお命も有ものかせてわらばご替らんご谷におりんごし賜ふを烏陀夷袂を引止め御發心の御底意凡夫の智慧には量り難し御修行の妨げイヤくくく逆も此徳見捨にしておなかにやごりし若宮へ御詞有りし其上は未練も残りじコレ申さ聲を限りに泣給へご雲間遙に隔りてこたふるものは松ふく風詮

方もなき御有様壘壘沙彌は仙人の窟
の前に頭を下げ法性無漏の智慧の
火は石に有るか燧に有か何を以て焚
薪師匠如何ぞ宣へば寂寞の扉押開き
現れ出し阿羅々仙人木の葉衣に肌荒
れて亂れし髪は白銀の鏡の如き兩眼
にてはつたまにらみ聲あらゝげ本覺
大悟の智慧の火は一切の煩惱を燒盡
す汝迷ふたり故郷の妻子の縁によつ
て一念愛慾起りし故修行却て罪障其
業にひかれて薪枯れてもゝこの生木
となる。生木を切つたる殺生罪汝に
與ふる三十棒と柱杖振上げ丁々々悟
つたるか壘壘棒に耳あり舌ありと、
押ツ取直して又丁々杖は師の心法
打たるゝ弟子の六根淨御目もくらみ

御息も早たえんゝに見えければ谷を
隔てし安陀羅女見るに見兼聲を上ア
レ見や烏陀夷情なや錦繡綾羅を身に
纏ひ荒き風にも當賜はぬ御有様を打
捨て衆生を助けん思召つらき苦患を
御身にうけ今打杖を我身にかへごふ
ぞ詫してゝ烏陀夷に取付泣賜ふ
理せめて勞はじし師の仙人の杖の
音響に響く大音にて清淨水を汲來れ
と言ひすて窟に入給ふ、漸々として
壘壘沙彌起直り給へごも打たれ給ひ
し杖あらく御衣も寸々に破れ亂れし
玉かづら藤にて結べる水桶を又御肩
に打ちかけて九十九折なる谷道をよ
るりゝ御幸有る御有様ぞ勞はし
き烏陀夷も今は忍びかれないかに御修

行成れば逆御身に過ちある時は胎内
のお子には誰を父御さ呼すべし薪も
水も我々ぐ汲運で參らせん泣々流
れに立寄れば太子御涙を浮べながら
水汲み薪樵る斗り憂き苦と思ふあさ
ましさよ。無常の利鬼身を離れず追
來る事の速やかき嶺より落る車の如
く繋ぎ留めざる玉の緒の樂しみ
つて苦患なる又胎内の胤ばかり我
子とは思はぬぞ一切衆生は我子也洩
さす救ふが大慈大悲、菜摘水汲難行
は衆生に替る法の水三界流轉の濁り
江も底澄む水を汲んさてだんぶんゝ
汲上げて濡し袂に影うつる月も山
路を登り坂はつしゝ打ければ何
かは持てたまるべき忽ち呼吸切れ果

て絶へ賜へば遠目にも見るに忍びず
 耶輸陀羅女うんご斗りに息絶えれば
 烏陀夷は何ぞ詮方も氣付よ水よこ立
 願ご師の仙人は目もやらす倒れ伏た
 る瞿曇の眷エしつかご踏へ端座をし
 め一念不記滿虛空中本來不滅白道阿
 字と瀉水の法を心に觀じ又も蹴返す
 太子の体息吹返すご見へけるがすん
 ご立つて桶の水大地にがげご打あけ
 給ひ窟の内に入り替り諸法從本來生
 死寂滅相十方佛土中唯一乘法無二
 亦無三ご高らかに成道正覺悟りの金
 言定印たゞし座し給へば仙人しさつ
 て禮をなし善哉く釋迦牟尼如來天
 人師佛世尊昔の諸願満足し衆生を導
 き賜ふべし我は大通智勝佛劫成世界

の契を違へず阿羅々仙人と現じたり
 ご宣ふ御聲薫しく光を放ち失せ給ふ
 釋尊微妙の御聲にていかに烏陀夷承
 はれ斯成道をなす上げ御母夫人の御
 爲に祇園精舎の結果よりごふり天に
 登るべし我姿を殘さんにはげつしや
 國の主なる烏天大王此弓手に生茂る
 栴檀香木を斧なしてひしうかつまに
 作らしめ末世の衆生に殘すべし我は
 程經て涅槃の空闊浮に滅す語も有べ
 し筐に残す我像は南瞻不淵大日本嵯
 峨清涼寺に止まつて有縁の衆生を再
 度すべし然ば生身寸替りばなくご仰
 は今に都路や北野の嵯峨に尊くも衆
 生再度の御誓ひ實有難き。耶輸陀羅
 女は禮拜し悟りの道に入給へば強者

の功德身に餘り我も我子も衆生し迷
 ひも暗れて有難やご仰に烏陀夷も實
 理衆生は元來草木迄迷ひのゆめの
 幻しご悟りの詞に釋迦無尼如來オ
 殊勝也出かしたり悟れば共に佛なり
 我れ無量劫昔より娑婆の往來八千度
 今こそ開く智惠の門出山の釋迦無尼
 如來大恩教主の御惠み御法の程こそ
 尊けれ。



將監閑居の段

近松巢林子作
傾城反魂香

土佐將監閑居の段

中 竹本貴鳳太夫
鶴澤芳之助
鶴澤友之助
切 竹本津太夫
鶴澤友之助
レツ 鶴澤友之助

人形

土佐將監 佐將監 方監 平監 德助 吉田文五郎 吉田榮三 吉田玉七 吃房又 女助 雅助 修助 百理之姓

この淨瑠璃は寶永五年の作で時代物と世話物の中間を行つた作柄で近松翁影作中の雄篇としてこの四段目吃又平の條は歌舞伎にも古來上演せられて來たものです。只今では中村鴈治郎の極め附さも成つてゐます。この度竹本津太夫が御靈文樂座以來七年振で上場する津太夫得意のだしものであります。盛られたる内容は高嶋家を浪人した土佐派の巨匠土佐將監が山科わたりに閑居して繪筆にこそしんでゐるが、藪陰に現はれた虎は名畫に魂を入つたものと判り、これを弟子の修理之介が繪筆で畫き消

して師より苗字を許され光澄となるこれを知つたる兄弟子でその日のたつきにも困つてゐる浮世又平も苗字を乞ふが師の不興を蒙つて許されず弟弟子の打ついでの出世に引かへ自分の薄倅を女房と嘆くあまり、今生の想出に手水鉢に自畫像をかき、裏へ通つた一念に師より光起の苗字を賜はり晴れの、大頭舞を女房づれに舞調ふて主家の姫君取戻しといふ大役を師より仰付かつて、喜勇んで行くといふ、近松翁独自の名作であります。

床本 將監閑居の段(口)

爰に歌君の一靈が山野にはびこり草木を踏折り田畑を荒す事なれぬならず近郷の土民聲々に三井寺の渡より藤の尾までは見届けた此山科の藪影

へ逃込だに極つた擲き殺せ打殺せこ
 取々わめき騒ぎ立庵りの内より修理
 之介刀引提げ立出てヤア騒しい何者
 じや打ち殺せこはあばれ者か但し夜
 盗の押入かコリヤ此屋敷を誰かと思
 ふ土佐の將監光信が閑居なるぞ仔細
 有て先年勸氣を被り此所に身退く某
 は當家の門弟修理之介光澄さいふ者
 案内もなく卒爾千萬盜賊の類ひなれ
 ば一こに打止めんと反打て詰かくれ
 ばアコレ申私等は矢橋粟津邊の百
 姓信樂山から寅が出て荒る故隣郷が
 言合せ此數へ追込んだ探させて下され
 る口々に呼ばれば修理之介あざ笑ひ
 ヤア虎さ言ふ獸が日本に出た例し
 なしむだ言言はずに早歸れ〜〜
 早く〜〜と争ふ聲土佐の將監障
 子押明け聞たく〜天地の間に生ずる

もの有まい共極めがたし皆打寄てさ
 がせ〜と聲にソリヤかり出せこ
 ろい〜聲明松ふつてかり立る一む
 ら竹の下影にそりやこそ出たはさ火
 を上れば荒れに荒れたる猛虎の形人
 に恐るゝ氣色なく脊をたはめてぞ休
 み居る將監はたこ横手を打あらふし
 ぎやかんびの筆の竹に虎其筆勢に少
 しもまがふ所なしやは誠の虎にあ
 らす名筆の繪に魂入て現はれ出しに
 極まつたり今是程に繪畫し者はム、
 狩野之祐が末葉四郎元信ならで覺へ
 なしオ、聞へたり高島が御館騷動の
 場に四郎次郎有合せ難を逃れし筆の
 徳血汐を以て畫書し毛色こりや何に
 もせよ其證據には歩みし足の後有ま
 いと聞てこは〜百姓共草かき分け
 て尋れ共虎の足形あらざれば是は不

思議なお目利と心なき土民等も拜む
 斗りに信をなす修理之介師匠を拜し
 ア、有難や忝や今此虎を見て繪の
 道の悟りをひらき候、其印我筆先に
 てあの虎を消留て御覽に入ん、硯引
 き寄せ押いたゞいて筆を染め虎の頭
 にさしあて、筆引方に隨ひて頭前脚
 後脚胴より尾先に至る迄次第に消て
 失けるは神變術共言ふべし將監悦び
 オ、通れ〜〜げふり苗字を許し土
 佐の光澄と名付べしと印可の筆を與
 ふれば百姓共舌を巻き孫子の末迄話
 しの種ノウ皆の衆やあの上手な繪畫
 殿によいよおやまを十人程畫いてもら
 い金もつけがして見たいイヤそれよ
 りまた外に借錢さりの帳面を爰から
 消て戻ふものお暇申すぞ打笑ひ在所
 さして……。

床本 將監閑居の段(切)

爰に土佐の末弟浮世又平重起といふ繪師あり、生れ付て口吃り言舌あきらかならざる上家貧しくて身代は薄き紙子の火燧箱朝夕の煙さへ一度を二度に追分や大津のはづれに店がりして妻の繪の具夫のおど筆の軸さへ細もこで登下りの旅人の童むかしの上産物參錢五せんの商ひに命も錢も繫しが日蔭の師匠を重んじて半道餘りを夫婦づれ夜なく見まふぞ殊勝なる夫はなま中目禮ばかり、目禮ばかり女房傍から通辭してハア、また是はおよりませぬか誠にめつきりも腰かに日も長ふ成まして世間は花見の遊山のござはくくく致しまするこなたは山蔭御浪人のおつれくをいさめのため嫁菜のひたしに

豆腐のにしめさへへでも致しまして關寺が高観音へお供して春めく人でも見せませうと女夫申し居りますれども心で思ふたばつかり道者時分で店はいそがし洗濯物はつかへる爲業にはいかいかず日かな一日立すくみ何をするやらのらくら急げば廻る勢田鐵只今せうから貰ひまして練貫水の大津酒ゆめくしうござりますれ共此春からお仕合が直つて鰻の穴から出る様に御世にお出でなされませほんにつべこべわたしが言ふ事ばつかりこちの人の吃りさわたしおしやべりこ入あはせたらよい比な女夫が一組出來ませふアおはもじやと笑ひける奥方も御挨拶よう祝ふてたもつた今宵は奇妙な事あつて修理は苗字を許され土佐の光澄と名乗

るぞよ、又平も随分筆に心をつきや我名を上れば則師匠の名も出る道理ノウお徳そふぢやないかまあくまい所へ酒肴幸ひく盃もいたいてあやかりやいのこ有ければ又平時節に女房を先へ押出しせなかな突我身も手つき頭をさげ訴訟有げに見えければ女房お徳心得て誠に道すむら百姓衆の噂を聞き身は貧也不具なりおと弟子に土佐を名のらせ兄弟子ばうかくこいつ迄浮世又平で藤の花がたげたおやま繪や釣おさへた瓢箪のぶらんく生ても甲斐なしと身をもんでの無念かり尤共哀れ共連添ふわたしが心の内申も涙もこぼれます奥様迄は申せしかお直の願ひは此時節今生の思ひ出死での後の石塔にも俗名土佐の又平と御一言の

お救しは師匠のお慈悲と斗りにて涙にむせび入れれば又平も手を合せ將監を三拜し疊にくひ付泣居たり將監も不惑さに俱に心は亂れどわざこ聲をあらへげヤア又してもく叶はぬ願ひコリヤよつく聞け此將監は近江の國高嶋の御家來筋、則ち禁中の繪所小栗宗丹と筆の争ひ其上高嶋家の重寶雲龍の硯を宗丹達て所望すイヤきやつに持せじ我にたべこ互ひに意地を言ひつものりついに御前のお聞きに立つて某は勘當受て此浪人住居今でも小栗に従へば富貴の身も榮ふれ共一人の涙おみつを君傾城の勤させ子を賣つてくふ程の貧苦を凌ぐは何故ぞ土佐の苗字を惜むにあらすや修理之介は只今大功有そちには何の功がある琴書畫はこれの藝貴

人高位の御座近く参るは畫人物を得言はぬ身を以て及ばぬ願ひ似合ふた様に大津繪畫いて世を渡れ茶でも呑んで立歸れとあいそもなくしかられてお徳はばつこ力を落しコレ又平殿こなたを吃に産付けた親御を恨さつしやれと頼みなく又平も我咽ぶえをかきむしり口に手を入舌をつめつて泣けるは理り見えて不惑なる折節表に人音して將監殿やおはする光信殿と呼びり拔刀簀戸押開きすつこ入る將監目早くお身は狩野の弟子歌之助ならずや姫君を御供せしか何さくされば館の騒動いふに及ばず存知のこさく姫君の御供仕り漸々切ぬけ爰かしの忍びしが主人四郎次郎行方しれす是第一の氣づかひと心迷ふ其内に敵手ひざく追かくる

じや任せて置けと眞向に太刀さしかざし向ふ敵の腕骨脚骨嫌ひなく四角は一人なんなく姫君奪ひ取られ下の醍醐は雲谷が館なり伴左衛門を始めとして門をかためて寄付す刀のはがれついかん迄さかけ入らんさせしおイヤく主人の身の上心元なし後をしたふて尋る所存姫君の御事は將監殿宜しく頼み存するさ詞も足も血氣の若者後をしたふて走り行く將監心も心ならずサア我爲の一大事いかやせんと思案顔奥方も氣づかはしくイヤくせいては事の仕損じあらん殊に其伴左衛門姫君に心をかけむたいにくさく聞か上はお命には氣づかいなしごふぞ辯舌のよき人に將軍家の御意とたばかり取かへ

す分別はござらぬかといふに將監げに誠せく事はない何れもいふておみやれと額に小皺頼杖つき各々小首かたむくる又平何ぞ言たげに妻の袖引せなかつき指さしすれ共合點行かすしんきをわかし女房を引退てすつこ出師匠の前に諸手をつき唾を呑込てコ、こ、此對手にはセ、拙者が参り姫君をウ、うばひと、取つて歸りましよ將監きつと見ヤア面倒な吃め思案半に邪魔入るそこ立てうせぬかこ呵られてもおぢるにこそイヤ膝共ダ、談合と申す口こそ不自由なれ心も腕も天下にコ、こはい者がない拙者も分別致し叶はぬ時はゑんせう助定あつちへやるかコ、こつちへ取るか首かけのバ、ばくち命の相場が一分五リン浮世又平と名乗つては親もな

い身がら一身命はばきだめの芥名は順彌山と釣かへ粹の時から奮功なし命にかへて申し上るも師匠の苗字を繼たいばつかり拙者め遣はされて下さりませ申し、さり連は御承引ないか吃でなくば斯は有るまいエ、く、く、うらめしい咽ぶゑをかき破つてのけたい女房共さりまはつれな、いお師匠ぢやと聲を上て泣き居たる將監猶も聞入なく不具の辯の述懐涙不吉千萬相手に成て果しなしこれ、修理之介御邊向つて思案を廻らし奪返し來られよ早く、畏つたま刀提立出る又平むづ抱きこめマ、マンマン待つてくれ師匠こそつれなく共弟子兄弟の情けじやコ、此又平をやつてくれ後とも言はぬス、ス、すぐ様コリヤ又平、某、やだけに思ふ

ても師の命は力なし爰を放せイ、イ、ヤハ、ハ放しやせぬ放さればぬいて突ぞツ突コ、殺せハツハ、い、放しやせぬぞ修理之介も持あつかひ放せ、と捨合たり將監夫婦も氣をあせり放せ、とこさ、むれ共耳にも更に聞入れず女房お徳縫り付あれお師匠様の御意が有るおさましの氣ちがひやこもぎ放せば女房を取て投げ踏付け、じだんだ踏みナ、い、何じや儕迄わ、キ、キ氣ちがひこはエ、女房さへあなごるか不具は何の因果ぞやとごうと座を組み疊を打て聲も惜ます歎きける心ぞ思ひやられたる將監重れて汝よく合點せよ繪の道の功によつて土佐の苗字を繼てこそ手柄共いふべけれ武道の功に繪師の苗字譲るべき仔細なしならぬ、と

言切れば女房はつこ居直つてサア又平殿覺悟さつしやれ今生の望は切れたぞや此庭の手水鉢を石塔と定こなたの繪像を畫きこめ此壞て自害し其後の贈號を待つ斗りも硯引よせ墨すれば又平黙き筆を染め石面に指向ひは生涯の名残りの繪姿は苔に朽る其名は石魂にこまれど我姿を我筆の念力やてつしみん厚さ尺餘の御影石裏へ通つて筆の勢い墨もきへす兩方より一度に畫いたる如く也將監大きに驚き入り異國の王義之趙子昂が石に入り木に入るも和畫において例なし師に勝つたる畫工ぞや浮世又平を引かへ士佐の又平光起と名乗るべし此勢ひに乗て姫君を奪ひかへせと有ければつこ斗り夫婦が悦び又平は忝し共口吃禮より外は涙にくれ踊り上り飛上り嬉し泣こそ道理なれ將監重ねて心剛にて心ざし厚けれ共敵に向つて問答せん事いかあらんぞ有ければ女

房聞もあへず常々臺頭の舞を好きはらば諸共れつ脇にて舞はれしがふしの有事は少しも吃申さずサア又平殿悦びにめてたう舞て立まいかチツト答て立上り古き舞を身の上になぞらへてこそ舞たりけれ去る程に鎌倉殿義經の討手を向べし武勇の達者をふらばれし夫は土佐坊是は又土佐の又平光起が師匠の御恩を報ぜんと身にも應ぜぬ重荷をば大津の町や追分の繪にぬるこふんは安けれど名は千金の繪師の家今墨色を上げにけりかくて女房いさみを付又もや御意のかけるべき早御立ちとすいめけるチいしくも申されたり身こそ墨繪のさんすい男紙表具の体なり共朽て朽せぬ金砂子極彩色におこらじと勇すいみし勢はゆかし頼もし我ながら適繪筆の健氣さよ唐繪の燐張其を楯についたさ思し召イザお暇さ立出る將監庭に飛びおり待マ兩人吉左右の饒別せんこ

松竹本社各劇用達 秋替提灯傘販賣



大阪南区河内門前
宗津屋
 高橋

電話一七七番

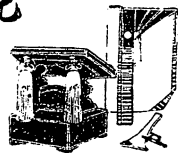
刀拔間も見せばこそ又平が像を畫し手水鉢
 二ツにござう切破つたり一座の人々あきれ
 顔女房お徳惚りしコレ申將監様大事の門出
 命づく身を祝ふての舞調何かお氣に入ませ
 ぬ又平殿を二つになされしは不吉を願ふお
 心か但しは狂氣遊ばしたかオウ疑はしく
 ば言ひ聞かさん昔都誓願寺の御佛は賢聞
 子芥子園さいひし人親子名乗の其しるし片
 形作り合せし御佛なりしに然るに此佛体朝
 暮兩眼より御涙頻成しに時の名醫是を考へ
 五臓を作り込だる佛体なれば正しく肝の臓
 の損じならん二ツに分けて是を直せば忽
 涙止りし事今の世迄も割符の彌陀と隠れな
 し此理を以て又平が魂込し此繪姿繪は吃ら
 ねど吃るは舌の舌は元來心の臓其心の臓調
 はざる故に吃る今石面の又平を二ツに切破
 此將監繪師の手の内中々思ひよられ共コレ
 此刀は主人より給はる名作其名作の奇特な

以て心の臓を斷切たれ、ば吃る事はよも有
 らじと言ふに又平頭を下げハ、有むたし
 くいよく首尾能姫君の御供申し立歸ら
 んと詞すいしき一言に奥方始め人々も二度
 惚りに又平は我でに我口疑はしく、らりる
 れる、まみむめも、さしすせそ、かきくけ
 こありやく直つたくいふはく何を言
 ふ狸百足棒百本天王寺のたうく念佛十チ
 申せば佛に成る誓願寺の佛の誓願匠の御恩
 を頭に戴きごうく力足踏又平は今ぞ
 出世の金願。あつばれ諸人の繪本ぞも勇
 いさんで急ぎ行く。

儀太夫海階本元
 見佐為愈英州海昌道具

加島新中清助

大阪東區唐物町四丁目御堂筋西へ入





近松徳叟作
伊勢音頭戀寝刃

油屋十人斬の段

油屋十人斬の段

福岡	貫	竹本大隅	大夫
女郎	おこん	豊竹和泉	大夫
女郎	お鹿	竹本相生	大夫
料理人	喜助	豊竹島	大夫
仲居	萬野	竹本鏡	大夫
喜多	六郎	豊竹富	大夫
泊り	客	竹本浪花	大夫
小女	郎	竹本文	大夫
仲居	居	豊竹千駒	大夫
下男	居	竹本長子	大夫
下女	居	竹本隅榮	大夫

この伊勢音頭の内容を申し上げます
 こ、阿波の國家老九郎右衛門の息、
 今田萬次郎は青井下坂の刀證議の爲
 め伊勢に來た古市油屋の抱女郎お
 岸と馴染んで放埒をつくし折角手に
 入れた刀も胴脉金兵衛に買入して金
 に代え折紙も相の山で騙取られてし
 まふ。後見役の小舅藤津左膳は之に
 意見を加へその家來筋にあたる御師
 福岡孫太夫の養子買に刀と折紙の證
 議を依頼します。買は其の手むり
 の爲めにかけて馴染の油屋のお紺の
 許へ繁々通つたが、かれて國家老
 を陥れんご旨を受けた徳島岩次と

いふ侍と藍玉屋北六といふ商人も
 油屋で豪遊してお岸とお紺を身請け
 の相談となる。買は伯母お峰の情で
 尾首よく刀を手に入れ萬次郎に手渡
 そうと油屋へ來てお紺と口説のうち
 に刀の中味を岩次にすり替られあま
 つさへお紺には愛想づかしをされ仲
 居の萬野やお鹿女郎にまで伊勢乞食
 の男傾城の罵られて突き出される
 かつこした買は腰の物を抜き放つて
 岩次、北六、お鹿、萬野と手當り次
 第に斬つたお紺も二階から投げた
 文を見るお岩次になびいたと見せた
 愛想づかしも買は折紙を手に入れる
 爲と知れた買も今大勢を斬つた刀も
 買は正銘の青井下坂で料理人喜助の
 働で更に裏をかいてすり替られて
 ゐたのであつたが、そうさば知らぬ

徳島岩次 竹本長尾大夫

鶴澤道八

人形

福岡貫 吉田玉松

女郎おこん 桐竹紋十郎

仲居萬野 吉田小兵吉

料理人喜助 桐竹門造

徳島岩次 吉田玉幸

藍玉屋喜多六 吉田文之助

女郎お鹿 吉田扇太郎

泊り客 吉田市松

女郎若菜 桐竹紋太郎

料理人男 吉田瓢轟呂

仲居 吉田覺三郎

小女郎 桐竹紋司

下男 吉田傳之助

下女 吉田利男

買は人殺しの科人さ刀の申譯に鳥羽の伯母の家で切腹するさいふの筋合で御座ゐます。

油屋十人斬の段

M 後にお紺は、うつこりさ、暫し思案に暮告る、遠寺の鐘も身にしみて、心さき付胸の闇、やゝ有て顔を上、折角思ひ、思はれて、二世さかばした貢さん、退ればならぬ浮世の義理、詞昨日伯母御様のお詞には、言號の櫛様さ、祝言をさくれれば、養子親へ義理が立たぬ故、思ひ切つてくれいさ、モ事を分けてのお頼み、さば言へ是が何さマア、一夜流れのあだ夢も、別れば惜しき、明けの鐘炎の中に暮さうか、あなたを退いて片時も、浮世の日影が見られふか、むこい、つれない、胸怒な、別れさ

言聲を聞てさへ、胸にしみつゝ悲しいさ、恨み涙にくれ居たる。詞モ此中からもくれぐれと、頼ましやんした折紙の、詮議。アノ奥の客の儘に持て居るさば思へども、帯紐解れば肌身は赦さず、アーマごぶせふぞ。チーそれよ、此身を任すも夫の爲め折紙を取かへし、潔よふ自害して、未來の契りを待が樂しみ、せめては死後の言譯さ、泣くく硯引寄て、書置く鹿の巻筆も、合今宵限りの命毛さ、又ふし沈み泣居たる。詞お紺さんく、お紺ごのは何處にぞと、言つて出てくるやりての萬野。見付られじご文巻取り、心もうはの空封じ。しらぬ萬野は聲高に。詞お紺ごのく、チーお紺さん、そこにかいな、そんな事知らずに、一遍さ尋ね

ましたわいな、イヤコレシコレお紺さんへ
 モ今更いふじやないが、此間からも、す
 めて居るアノ岩次様、大体よいお客じやな
 いぞへ、夫れにお前も物好きな、いかに心
 中立てるまで、アノかす福宜の貢づら、チ
 ホ、ホ、お紺様堪忍しておくなはいや
 ホ、ホ、ホ、モ今も今まで、お鹿様が、貢
 様から、度々の無心状、誠かと思ふて、身
 の皮剥いて打ち込だが、そら悔しい、私へ
 の懺悔、コレシコレ、此文を見やしやんせ
 アノ口先で、ちよぼくさご、古市中の女郎
 の油をぬすり廻る油虫、モ其油虫の事は、
 さんご思ひ切、岩次様に靡かんですりや、お
 前も出世、コレシコレお紺様へ、此萬野は
 悪い事はすくめませぬぞへ。モウ、ふつ
 つりご思ひ切らしやんせご、奨付けかける
 詞のわら、それごは知れど眞顔に請けて。
 詞チ、なるほど、此状の様子では、興の醒

めた貢様、そんならお前の言はしやんす通
 り、岩次様に乗り替ふはいな。エ、アノお
 紺様、そんならお前様ほんまに岩様に、乗
 替る氣かへ。何の嘘をいふ物かいな。お紺
 様、チ、好きやよやよ、ホ、ホ、
 い、コリヤコレ近年の大出来じやはいな、
 お紺様、チ、よさや、よやよ、ホ、
 い、そんなら直ぐに奥へ往て、改めて固め
 の盃、サア、お出さ無理やり、引立ら
 れて詮方も、涙かくして入にけり。斯さは
 知らず、うご、戀には心引かれ来る
 身の災難に福岡貢、こや角案じ彷彿ける。
 詞、ウ、アノ歌は油屋の二階座敷、阿波の
 客が居續け騒ぎ、テモマ面白そふに諷ひお
 るなア。が夫に引かへ心ならぬは萬次郎様
 のお身の上、今宵につまる御身の難義へ
 お紺に頼んだ折紙の詮議、今に何の返事の
 ないは、岩次の手にないのか、マア何にも

座王の— ユグレとマネシ
 備完の置装風冷ご氣換



座 竹 松 堀 頓 道

せよ、お紺にちよつこ逢たいと、見廻す内より出来る喜助、出會頭に。詞ヤア若旦那様。チ、喜助か、ヤ幸ひく、何ふそ首尾して、お紺に一寸逢してても、ヘイ畏りまして、お紺に見廻し。詞イヤ申し若旦那様したと、奥口見廻し。詞イヤ申し若旦那様憚りながら、一寸あれへ。喜助わしにか。ヘイ。何の用ぢや、モ今改めて申上げまするはいかなれども、日外お國の騒動より此伊勢路へお引越なされまして、あなた様には、福岡へ御養子、それ故親共も奉公引、此古市にて僅なぐらし。其後大病を煩ひて此古市へ私を呼、アノ福岡孫太夫様の今端の枕元へ私を呼、アノ福岡孫太夫様の御養子貴様は、我々親子が古主の若旦那様隨分さも心を付けて、忠義を盡せと、遺言でござります。夫で私も、何ふそ御恩が送りたいと存じますれども、モ高が料理人風情の私、其大切なあなた様、毎日毎夜の遊所通ひ、お紺様の浮名は、古市中一ぱ

い。福岡様には言號の奥様も有り、御養子の御身分で、あ、いふお身持ではお爲にならぬ、何時ぞは御意見申したいと思ふ折から、此お出會ひ。イヤ申し若旦那様、あまりせきくお出なされます所ぢやござりませぬぞへ、何をちよこさいなき召ませませぬ。モ斯様に慮外を申しますも、つゝまる所は、貴郎様のお爲、ホンニ私は夜の目も會はず、案じてばかり居りまするはい、ハ、ハ、ハ、ヤ是はしたり、何事も御存じの貴郎様、必ずお氣にさへられて、ヘイ下さりますな。ム、スリヤそちは喜兵衛が悴で有たよな。ヤコレハシタリ、モさすれば我が家にも家來同然、古主を忘れぬそちが意見、コ惡ふは請ね、忝ない、ガママ夫は格別、コリヤコレ大切な一腰、私も持って居ては人目に立つ、歸るまで預かつてたも。ヘイ私わしつかりお預り申しました。ア、コレ、

座花浪の月七

にかや涼を夏
海淡家廻賀志

すで得見目おの

其(その)一腰(いちご)は青井(あおい)下坂(しもさか)。エ、そんなら是(これ)が。いかにも、刀(かたな)は手(て)に入(い)りこも、是(これ)に付(つ)いたる折紙(おしぎ)を街(まち)られ、モ色々(いろく)と詮議(せんぎ)をすれ共(ども)、今(いま)に於(お)て行方(ゆかた)知(し)れず、何卒(なにぞ)折紙(おしぎ)を取(と)り返(かへ)さんご、毎夜(まいよ)此處(ここ)へ入(い)り込むも、若(もし)や詮議(せんぎ)の手(て)がかりも有(あ)るかご、心(こゝろ)を碎(くだ)く某(それがし)、コレ、必(かな)らず他言(たごん)は無用(むいよう)ぢやぞや。ヤ是(これ)は、左様(さやう)も存(ぞん)ぜず、慮外(りごう)の段(だん)は、眞平(まへい)御容救(ごようきゆう)。シテ其折紙(そのおしぎ)を銜(かた)つた奴(やつ)も、此油屋(このあぶらや)の内(うち)に。サ儘(ただ)にそれ(これ)も知(し)られぬごも、客(きやく)やご思(おも)ふばアノ奥(おく)のコレ喜助(きすけ)一寸(いちゆ)耳(みみ)を貸(か)しや。エイ、そんならアノ岩次(いわじ)も。コレシイ、密(ひそ)かに、何か(なに)は奥(おく)の大騒(おほさわ)ぎに、首尾(しゆび)を作(つく)るは最(さい)屈(くつ)竟(けい)。そんなら喜助(きすけ)、若(もし)旦那様(だんなさま)、サア、こちへ先に立(た)ち、案内(案内)に連(れん)て福岡(ふくおか)貢(こう)、暖簾(のれん)の内(うち)へ入(い)りにけり。此方(こなた)の障子(しょうじ)引(ひ)明(あ)けて、窺(み)び出(で)たる徳島(とくしま)岩次(いわじ)、何か(なに)心(こゝろ)に打(うち)ちうなづき、差足(さしあ)り拔足(はき)暖簾(のれん)の内(うち)、忍(しの)び入(い)つて二腰(にご)の刀(かたな)をそつミ

前後(前後)見廻(みまわ)し、己(おれ)が刀(かたな)と貢(こう)の刀(かたな)、手(て)早(はや)に目釘(めくぎ)コツチ、身(み)を摺(すり)り替(か)へる即座(すなは)の惡智(わるち)惠(ゑ)暖簾(のれん)の影(かげ)より窺(み)ふ喜助(きすけ)、それ(これ)と白刃(しろやま)の二腰(にご)を、元(もと)の如(ごと)くにさし納(お)め、又(また)も納戸(なだ)へ持(も)つて入(い)る。お紺(お紺)は過(す)す無(む)理(り)酒(しゆ)の、酔(よ)に心(こゝろ)も亂(みだ)れ足(あし)、岩次様(いわじさま)と、呼(よ)び立(た)てられて出(で)て來(き)る岩次(いわじ)。詞(ことば)チ、岩次(いわじ)様(さま)としたごまが、座敷(ざしき)を外(は)してお前(まへ)は何處(どこ)へ。ア、イヤ一寸(いちゆ)手水(てみづ)に。アノマア嘘(うそ)ばつかり。エイ、何(なん)の嘘(うそ)を云(い)ふてよいものか、證據(てんこ)人は北六(きたろく)、萬野(まんの)。ソレ用意(ようい)よくば早(はや)是(これ)へミ、いふ内奥(うちおく)に聲高(こゑたか)砂(さ)詞(ことば)相(あ)々(あ)相生(あひま)の松(まつ)こそ目度(めど)かりけれ、北六(きたろく)萬野(まんの)もさり、道具屋(道具屋)屋(や)筋(すぢ)さん盃(さか)硯(いん)蓋(ふた)、鉦(かね)、鉢(はち)に携(たづ)へて。詞(ことば)サア、申(まを)しお紺(お紺)様(さま)岩次(いわじ)様(さま)の固(かた)めの盃(さか)、色直(いろな)しは直(す)ぐに床(とこ)入(い)る。詞(ことば)ササア媒介(ないきやく)役(やく)は此(こ)北六(きたろく)、嫁君(よめぎみ)から吞(く)んで差(さ)し給(たま)へミ、無(む)理(り)に突(つ)き付(つ)け注(つ)ぎかくれは堪(こ)へ兼(か)て、馳(か)け出(で)る貢(こう)。お紺(お紺)も盃(さか)引(ひ)つ

吉例のお目見得

會我廼家五郎劇

座 中 りぼんさうご

たくり、落花微塵を投げ付けたり。詞ヤイ
 お紺、おのりや此盃仕ては濟むまいぞよ
 ナ、誰かと思へば貢様、お客ご盃するが
 何うして濟ぬへ、イヤサ一と通り盃なら
 格別、此盃ばかりは、さす事はならぬわ
 い、コリヤお紺、おのりや是まで言替した
 事、皆忘れたな、モ最前から見て居れば、
 はてくろしい座敷ぶり、エ、まう了簡がこ
 立ちかゝるを、岩次は引き退け詞ヤア、
 かす禰宜の大馬鹿者め、身が揚詰の女郎に
 指でも差さば、頬でも脛も打折るぞよ、
 云ふに萬野が、しやくり出で。詞コレイ
 ナア、是々貢様、お前はマア此方の内へ、
 誰か許してござんしたへ、お前のやうな油
 虫はナ、顔見るのも胸が悪い、アイ縁起が
 悪い、サア、疾つぎ去んでもらひまし
 よと、すつかり云はれて猶急立。詞コリヤ
 萬野、まあじなご云ふな、此貢女郎の

油を何時吸たごことがある、サア、夫聞ふ
 アノマア白らしくしい顔わいな。ヤ是、
 コレお紺様、最前の文見せてやらんせご
 云ふにお紺が懐より、取り出し渡す以前の
 文。一貢が見て吃驚。詞ヨウコリヤおれ
 が名を銜つて、女郎のお鹿へ無心の状。何
 と覚えが有うがな。イヤ知らぬ、元より譯
 有る仲ぢやなし、こんな文やつた覚えな
 あい穢い、アノお鹿、風俗ご云ひ、顔さい
 ひ、悉皆猿芝居のおそめ、あんまり呆れて
 物が云はぬご、悪口聞て馳せ出るお鹿、貢
 が前に臺白なり。詞コレ、貢様、最前か
 ら聞て居れば、餘りじやぞへ、アイ私
 しや何うでお紺様のやうに、美しくうばな
 いけれど、顔でお客は取らぬぞへ、コレ肝
 心の時にはな、ぐつたりさお客につくすに
 よつて、終に一日お茶引た事はござんせぬ
 お前も夫を見込に、アノ萬野様を頼んで付

夏を忘る爽快な芝居

新國劇の公演

あなとの角座

正午と五時半開演

文、其度々に、コレ／＼見なされ、此通り
 になア、二歩ちよつこお借、ソレ又此狀に
 三歩借り、まだ此處に有る、ソレ見なされ
 又一兩入るのこ、モ親にも聞ぬ無心をば、
 五度十度の事かいな、エイ何を夫に今更知
 らぬこは、ソリア卑怯ぢやわいな／＼。筆
 先で瀟しこみ、身の皮はいだ生盗人、エ、
 腹の立つ／＼と、云ひつゝ兩手に胸づくし
 引摺む手をもぎ放し。詞エ、様々のたけ言
 身不肖なれども福岡貢、そちらに無心云ふ
 やうな己ぢやないわい、コリヤお紺、是に
 は何ぞ譯が有らふ、譯をいへ、何うじや
 ない、チ、お前の内證の文が、私の手に
 入、腹の立つは、コリヤもつこもでござん
 す。が、申貢さん、お前と私と仲は、人も
 知らサ仲ぢやぞへ、金の入事があるならば
 打ち明けて、かう／＼と、いふて下さんし
 たら、何んば甲斐性のない私でも、三十兩

や五十兩の金、まんざら否とも云ふまいに
 僅二歩や三歩の端た金、お鹿様に無心云ふ
 こは、モみす／＼知れた。イヤサ、見下げ
 果てた心ぢやな、モウ／＼、色も戀も
 さめ果てたわいな、サ夫ぢやによつてふつ
 つりこ、お前の事を思ひ切、岩次様になび
 くのでござんす、アイそう思ふて下さんせ
 と、けんもほろ／＼に言ひ放す。詞コリヤや
 いお紺、おのりや氣が違ふたな、おのりや
 モ流れの身にも誠ある者と思ひ、取交した
 起請誓紙、まだ其上に大切なイヤサ大事の
 事まで請合ひながら、わりや夫ぢや。エ、
 イあだごんな違ひました、アイ性根がくさ
 りましたわいな、モまい／＼／＼まい付か
 ずと、早う去で下さんせと、口には云へど
 心には、チ、道理でござんす、チ、道理じ
 やと、云ふに云われぬ此場の時宜、血を吐
 く思ひ押隠す。知らぬ貢は腹立涙、傍に北

南 一 温 泉 料 理

電 話 南 西
 七 七 一 五 六
 〇 一 三 二 三
 一 一 二 九 〇
 番 番 番 番 番
 番 番 番 番 番

大 阪 四 ッ 橋



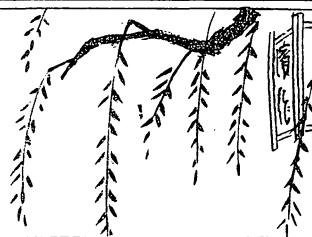
六高笑ひ。詞ハ、コリヤ可笑しいわいな客が女郎に物証して取るこは、コイツは新しいわいな、コリヤ新版じやわいな、ハ、是が本の伊勢乞食じや、何むな當る憎て口、岩次も片頬にせいら笑ひ。詞ア、イヤモ聞けば聞くほど馬鹿な詮索だわいなお紺が心底聞く上は、今夜中に身請して身お女房、ドレ金の威光を見せうかいと、お紺の膝を假枕、脛ふんぞらす傍若無人。見るに貫ば齒きしみ齒切。詞エ、見違ふた、あのこ、なごう畜生、其根性とは知らず、大事を明かしたか、エ、無念なわいな、アミ、は云へおのれに限つて、よもやそんな根性とは知らなんだくわいな、睨む眼にははらはら涙、お紺が胸は猶百倍、張り裂くばかりのせぐるしさ、涙紛らす煙草さへ、焔ほにむせる思ひなり。納戸に始終立ち聞く喜助、刀を持って走り出で。詞、貫様、モウお歸

りなされませ、悪い事は申しませぬ、サお預り申したお腰のものさ差出す刀引つたくり、腰に差す間も氣はしゆつくり、刀の違ひに目も注かず。萬野は傍へ立寄つて。詞コレシ貫様、お前はまう喋り仕舞かへ、チ、氣の毒やの、ヤコレシ貫様、ちよつここちらへ御出でななせ、サア、早うごんせエ、早うおいななせ、ヤナニ貫様、最前が段々の失禮、サアお腹が立ふ、尤もござんす、私に免じて、ごうぞ堪忍して上でおくれなさんせ、ヤコレシ貫様、何はお前がやきく思わんしても、錢の切目お縁の切れ目にやわいな、アノお紺さんを恨みなさるゝ事は徹塵もないぞへ、お前の其素養を恨まなせ、モほんに、お前のやうな貧乏神、片時置のも家の不吉、サア疾こそお歸り、ようお出ななつたへ、エ何、煙草入お忘れたのかへ、ドレ、取て

なつおはり歸おの座樂文
上召お蓋一で前板の作濱
をり

濱作

新町



来て上ませう、サア〜お歸り〜、エ、去にやかれよ、突出す門口、堪へ兼ねて及の柄、手にかけながら忠孝の、二字に引かれて喰ひしげる。詞チエ〜うぬ。何ぢやへ齒を削出し、そふらひしをひねくつて、何かへ、私を斬る氣かへ、面白〜、サア〜斬られようサ、何所から切りなんす。コリヤ萬野おのれはな。サアお斬りなんせエ、勝手にさらせよ、道を蹴立て、立ち歸る。萬野は跡を見送つて。詞サアサア油虫の幕が切れた、サア岩次様、北六様、是からば色直し、お床入の玉子酒、お紺さんも一所に、サア〜二階へ〜と、云ふもそれ者の高調子。詞イエ〜私しやまだ岩様に帯紐は得解ぬわいな。ム、スリヤなぜ〜、サイナア、お前の持つ居やしんす帛紗包、定めて色の起請か文、それ見ぬ内は疑ひは晴れぬわいな。ナニ是か。アイ、

コリヤ大切なアイヤ、大切なく〜金比羅様の御守、サ金比羅様のお守にもせよ、私に見せて下さんせにや、眞實心か解ぬわいな。テモ扱も女郎さいふ者は疑ひ深ひ者、ハ〜、アイ是非に及ばぬ、大切な品なれども、其方にしつかり預けるぞ。アイ、アイ〜合點も一寸遅れ、嬉しや恐さ胸慄ひ、足を踏みしめ段階子、二階へこそは上り行く。岩次は跡に撃ひそめ。詞コリヤ萬野、身が刀を早う是へこ、いふに心得腰簾の内、刀抱へて走り出で、渡すを取て打ながめ。詞コウ〜、コリヤ是身が刀では無い。エ、それなら買が取り違へて去んだに違ひはないさいふに、北六勇み出で。詞何じや、買も刀を取り違へて去んださば、天の典へ、是こそ望む青江下坂。アイ、イヤ〜夫が大間違ひだわい、最前密かに買が刀さ身が刀、中子を摺り替へ置たに、取違

座王の界斯は理料お

店本家るつ

六二 一五 三三 三三 } 局本話電 目丁五橋今

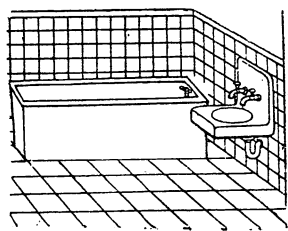
へて去に居つたが本の下坂。エ、ごんな、私かちよつと一と走り、ア、イヤ、申し其お使は私に参りませふと、云ひつゝ納戸を出る喜助。詞、喜助か、よく気がついた、買に追付き、腰の物をかへてこい、サ早う、手に渡せば。ヤまつかせ合點と馳り行く。萬野は俄かに心付き。詞、コレ、申し岩次様、お前はマアめつそうな方じやわいな、アノ喜助はな、慥か買ひ譜代の家來じやさいなと、聞くより岩次は興奮め顔。詞、サア、壺じや、岩次様、壺は何壺じや、水壺か、土壺か。エ、千壺じや、コリヤ、萬野、あわてなく、と云ふて身共もあはて、居るわいコリヤ、萬野、そちは喜助に追付いて刀を取り、買ひ刀を替へてこい。ハイ、心を得ました、買に逢ふて刀をたくり、急度お渡し申しませふ、ドリヤ一走り身繕ひ、襖

引き上げて。詞、イヤ、喜助殿、聲は先き、體は跡に心も空、足を早めて、走り行く。岩次は跡を見送つて。詞、萬野、戻つてくるまでは、皆を相手二階で飲ふ、サア、こちへも引き連れて、二階へこそは行跡へ、又引返へす福岡買、合取違へたる脇差の、身は正眞の下坂とも知らず、知らねば氣もそゆる、門の戸引明け内に入り、詞、コリヤ喜助、萬野は居らぬか、エ、居らぬか、見廻す折しも、遣手の萬野、息もすたく立ち戻り、顔見合せて。詞、ア買様、お前もいかに周章るまで、腰の物を取違へるといふやうな、龐相な事がある物かいな、其刀こつちへと、取りにかゝるを突放し。詞、イヤ身が刀から先へ渡せ、エ、マア渡さぬとて取らずに置ふか、エ、此刀も、取にかゝるを續けさま、打てばはつしり繪割て、思はず知らず一と刀、詞、ア、



ちめた。チーウ貢様、お前斬りなはつたな
 アレイ〜と泣き叫ぶ、聲立てさせじと口
 に手を當て、見れば血汐に身は紅い。詞ヨ
 ウヤ〜、南無三手を廻つたか、モウ百
 年目と又すつかり、斬られながらに逃行く
 を、髻摺んで引き戻し、肋骨をぐつこ〜と
 るぐり、其儘息は絶え果てたり。折しも奥
 より北六、岩次、跡に續いて出てくるお鹿
 詞岩次様、北六様、北六様と尋ねる向ふに
 立ち塞がる。詞ヤア貢様、アレ人殺しじや
 く、アレ〜と云ふ聲に、コリヤさせぬ
 ばと北六、岩次、留にかゝるを、身をかは
 し、左へ廻る北六を、肩先下りに切付くれ
 ば、コリヤ叶はぬと氣轉の岩次、奥庭さし
 て遁れ行く。お鹿は足も地に付かず、こけ
 つ、合轉びつ這ひ廻る、おのれお鹿と云ふ
 聲に、思はず知らず立ち上り、逃行く後を
 遁さじと、躍りあがつて、合唐竹割。物音

聞き付け勝手より、起番男、仲居、下女、
 物騒ましきは何事と、差出す仲居が手燭の
 光り、ふり向く拍子、貢の顔、見るより三
 人足わな〜。詞ヤレ人殺し、く、く
 と云ふ間も待たず左より、右の腕を斬落す
 うんさ仲居が即死の有様、見る兩人がうる
 たへ廻り、奥さ表へ逃げ行く男、外へ出な
 ば面倒さ、聲をもかけず後袈裟、返す刀に
 下女が首、水もたまらず斬り落す、音も分
 らぬ寝さぼけの、小女郎が出る足元に、血
 に這つて、合べつたりと、こける拍子にお
 鹿が傍。詞チー此やうな所に、水を流して
 チー冷た、チー爰に寝てじやは誰じやいな
 ア、コレ起んかいなくと、云ひつゝ立寄
 り見て悔り。詞アレお鹿さんが斬られてじ
 や、アレ〜と云ふ間もなく、片足丁と斬
 放せば、片足立に、一い二う三、よろ〜
 く〜と、鉢前の、手洗鉢に取り付て、其儘



化粧タイル
 水道衛生工事
 洗面、浴場、
 水洗便所設計
 汚水浄化装置
 特許無臭便所

西區立賣堀北通一丁目
 新一橋
岡部商會
 電話新町 六六九
 二二七六
 阪急 夙川
岡部商會支店
 電話西宮 一九七六

息は絶果てし、無慘さいふも餘りあり。サ
ア此上は岩次一人取逃しては、刀の在り家
詞此一問こそ、ム夫さ、窺ふ内より泊客。

詞ア、一ばい機械にぐつたりと寝て退けた
酔醒の水の心地や朝櫻かハ、ハ、ハ、ハ、コ
リヤ灯も消えて有るはい、さ云ひつゝ出る
廊下口、窺ふ貢が及の光り、コリヤ堪らぬ
さ逃げ行く庭先、逃る人影岩次さ心得、追
つて行く。寢間より出る合方女郎、貢を客
さ心得て。詞申し此ひつさんはいな、ごこ
へ往きなんす、申しそちらは前裁さますよ
落ちなんすなへ、あぶないさますよ、水さ
いますか、コレシ水はこちらに有るわいな
ご扱帯も脇へしごもなき、裾もほらく追
行女郎。合振り返りて拜み打。客はほう
く樹木の蔭に、息を詰てそかみ居る。

コハ心得ずと燈籠の影に透して、慥かに岩
次、ござんなれど、襟髪掴み引出し、土に

さし付け、にじり付け。詞サア下坂の刀は
何處へ遣りしぞ、眞直ぐに白状ひるげさ、
ひしぎ付けられ。詞ア、申し私は何んにも
知ませぬ、ヤア今になつて知ぬまは卑怯至
極、云はぬさて云はさいて置ふかご、云ふ
内に來る人音に、南無三三、ためらふ隙に
刎れ返し、逃げ行く後を横なぐり、直に立
寄願見れば。詞ヤアコリヤ岩次ではなし。

チエ、取逃せしか残念と、拳を握り居た
りける。お紺は驚き心も空、こけつ轉びつ
走り寄り。詞貢さん、ヤアお紺か、覺悟致
せと突かける。詞マアマア待つて下さんせ

いなア、サア、腹の立は尤もなれど、是
には段々譯のある事。ヤア何の譯の事さ、
又振上る刀の下、コレイナア、詞マア氣を
鎮てまつくりさ、是見て疑ひ暗らしてさ、
投げ出す包手に取上げ。詞ヤアコリヤコレ
折紙、ム、それなら宵の難面は。サイナア

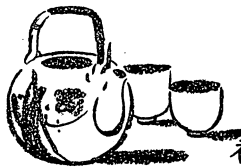
高級文房具
畧中贈答品

堂々生田黑

大阪・心齋橋順慶町
船場 136・4128

お前に忠義を立てさせたさ、ごうやら斯うやら岩次を騙し、首尾よふ手に入る此折紙を、云ふに貫ばハ、ア今更に後悔、涙の折から、喜助は心ならざれど、もしやと思ひ立ち戻る。詞喜助か。フワ若旦那、シテ此有様は、ごうも堪忍ならぬ故、喜助赦してくれいよ、刀の柄に手をかくれば、其手を押へて。詞コリヤ狼狽て何さなされます。チ、狼狽た。最前そちに預けた刀、サ夫は其處に持てござるの、眞の下坂。ヨウそんなら是れが、エ、有難や〜な。サア申し二種ともに揃ふ上は、一時も早う萬次郎様へ早う早うお渡しなされませ。喜助、お紺段々の心遣ひ、何にも云はぬ、チエ、忝いシテ此場の首尾は。ヘイ私か呑込みました跡構はず、萬次郎様へ。ム、然らば喜助、跡を頼むと云ひ捨て、立出んとする所へ小次をぬつと徳島岩次。ヤアご〜へ〜。

詞大事の刀こつちへ渡せと、打てかれば身を替はし。シヤよい所へ徳島岩次、己れを方々尋ねしに、こ〜へ出たは百年目と、打つてかれば切り拂ひ、切り結び、透を見合せ一と刀、うんぞ倒るのをつかいり、恨身の刀受取と、さし通されて七轉八倒、心地よくこそ見えにけり。傍にお紺は心せき、夏の夜なれば早や明方、少しも早う其刀を。チ、云ふにや及ぶ。詞忠義を立ちも二人の情と、心も勇む足勇む、忠義に心勇み立ち屋敷をさして、急ぎ行く。



大及池橋

茶屋

電話新町二番

四ツ橋畔より

—六月の消息日誌—

△六月五日

名曲を揃えた六月興行の初日を開場

△六月六日

大阪方面委員の岡嶋様も、東京大久保侯訪

問の途飛行機にて御夫妻同乗文樂座のボ

スターを東京迄空輸されましたあつく感

謝いたします。

△六月七日

BKより『沼津』一段を古軼太夫が小揚

げ津大夫が平作内を舞臺中繼で放送した

△六月十日

ロシア大使館附スパルイン博士夫妻來觀

白井社長と記念撮影をせられたも非常
に日本通で十種香狐火までを觀覽され満足
の意を表された。

△六月十一日

住友總務の川田純氏の紹介で永年巴里に

あつた武林武想庵氏が久方振りの故國の

土を踏んだ第一印象に郷土藝術の人形淨

瑠璃を見物された。

△六月十二日

朝日電池招待會で二百五十名の方々が

觀覽されました。

△六月十四日

大阪美育協會主催になる近畿中等學校圖

畫教育大會の懇親會場となり、七十五名

の參會者が人形の極美を讚賞されました

大坂の一樂場

千日前 樂天 地

中 央 館 の お 芝 居

モドコ館の樂戲
ネキ館の映畫

△同日

大阪灣に入港の第一艦隊四十隻の乗組將校慰安のため招待しました十四、十五、十六日三日間碇泊中隨意御入場の便に供しました。

△同日

つげめ太夫後援のため長唄の家元杵屋寒玉、杵屋六左衛門父子が打連れて見えられた。

△六月十六日

大阪方面委員の岡嶋様も社会課長大谷繁次郎氏主事小菅氏外廿四名氏と交樂座の御宴會で來觀され貴賓席前で記念撮影をされました。

△同日

大阪高等醫專の劇研究會の會員連が二十

名「交樂座御宴會」で來觀されました。

△六月二十日

大阪朝報主催のドラマリーグが約百名の參會者で來觀されました。

△六月二十六日

竹本土佐太夫後援のため土佐太夫の生地土佐出身の郷黨よりなる在阪土佐婦人會が多數で來觀され近來の盛觀を端しました。

△同日

連日満員のうちに六月興行をうちあげました。御愛顧のほどあつく御禮申上ます

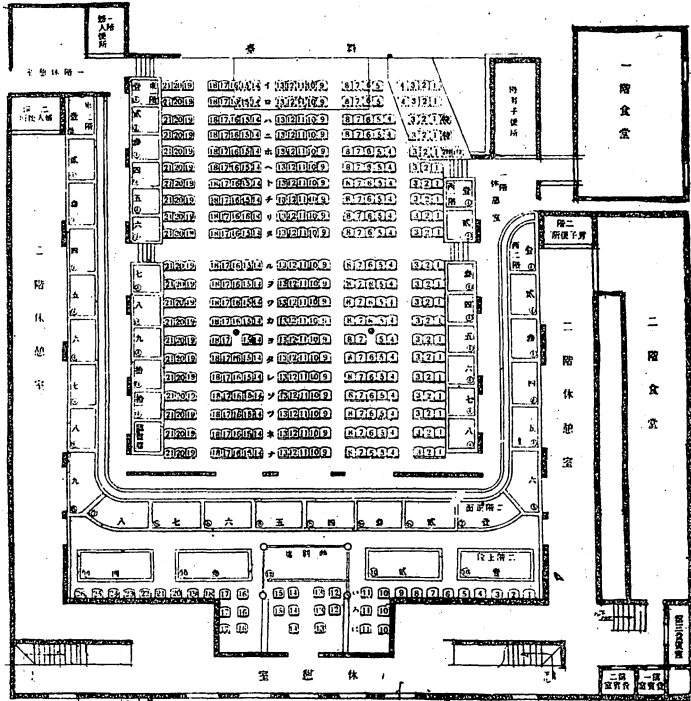
御期待の映畫が見易い

辨 天 座

朝日座の引越興行

松竹キ景最新版の封切場

文樂座御場席案内



御観覧料の外一切御不要の上
大部分椅子席になつて居りま
すからお一人でも御愉快に洋
服でもお樂に御見物お出来、
またお出入り御自由です。

前、賣切符一等お座席一等椅子
席のお切符は五日前から發賣
致します、また五日以後のお
切符も一等席に限り御豫約申
上げますから上圖の座席表
に依つてお早く御望みの御場
席をお申し込みになればお心
のまゝにお好きな處が御自由
にされます御用命の節お呼出
しの電話は

南四七一一番で御座ります

切符賣場一等席切符は當日、
前賣さも正面西側本家入口に
て發賣して居ります。

二、三等切符は當日正面入口
にて發賣致します。

尚多人數様お団体様のお申込
も御相談いたします。

てしと者一唯るたし化理合の濟經と味趣
るるてつ賽を讚絶今只

會宴御の座樂文

スピード時代の尖端を往く

「文樂座の御宴會」

絶大なる御好評にお應へして
大衆的に進出せる新様式

(B) 金四圓也 (御一人様)

一等席で御觀覽をねがひ
お食事は快美な「ランチ」
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

(A) 金五圓也 (御一人様)

一等席で御觀覽をねがひ
お食事は皆様本位の御定食
(和食洋食兩様の設備が御座ります)
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

- お申込は二十人様以上を受付申上ます。
- 記念撮影のお寫眞は終演と同時に持歸り出来るやういたして
おります。
- お申込はお場席其他の準備の都合上五日前にお願ひいたします
- お申込は四ッ橋文樂座事務室へお願ひします。
- お電話の御用は前賣専用南四七一・三七八八・七四〇八番へ

文樂座使用規定

- 一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ
- 二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ
若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前デモ御使用中デモ御使用ヲ取消シ致シマス
- 三、當座御使用料金ハ別表ノ通りデアリマス
但シ長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス
- 四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ
但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス
御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出アラルシ時ハ半額御返却申シマス
- 五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用テ必ズ其ノ設備ヲシテ戴キマス
- 六、之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス
御使用者ノ御希望テ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用テ特別ノ設備ヲサレル事ガ出來マス
- 七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、若シ之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ、費用ハ御使用者カラ申受ケマス
- 八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス
- 九、御使用者ハ當座従業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン
- 十、當座従業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任ゼマセヌ
- 十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

文 樂 座 使 用 料 (一日)

時間 場所	收容人員	晝(自正午 至午後五時)		夜(自午後六時 至同十一時)	晝(自正午 至午後十時)	
		平日	土曜	日曜 祭	平日	土曜
文 樂 座	約 850人	平日	80 圓	100 圓	160 圓	
		土曜	80 圓	110 圓	170 圓	
		日曜 祭	90 圓	110 圓	180 圓	

◆上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◆割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器 具 御 使 用 料

器 具 備 考	數量	料 金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回 15圓
同	同 普通燈ノミナラザルトキ	1回 20圓
所作舞臺	晝 夜	1回 10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回 50圓
同	晝夜通シ	1回 70圓
アプライトピアノ	晝 夜	1回 20圓
音樂譜面臺	晝 夜	1臺 10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺 10圓
スポット	同 大(1000W) 小(500W)	1臺 5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺 5圓
シーリングスポット	100W 500W	1臺 3圓
サスペンションライト	100W 500W	1臺 2圓
フットライト	20W 100W 7球	1本 1圓
セラチンペーパー		1枚1回 1圓
大 衝 立	晝 夜	1對 5圓
演 壇 設 備	同	1回 2圓
其 他	必要ニ應ジ實費	
受付2名、案内10名、 電話係2名、下足2名	1日1人 1圓宛	16圓
冷風裝置使用料		無料
暖風ラザエータ使用料		無料

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。廊下及び場内御散策の際は二階西側休憩所前にお化粧室が御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處で願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帯品は

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があり、すからそれへ願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帯願ひます。

お場席券

各自に御持ち下さい。切符に一枚づつ番號が附いて居ります。お場席の番號をお忘れないうちにお願ひいたします。

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお飲み下さい。蒸しタオルの準備が御座りますから御自由にお使用下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。

お電話は自働車の御用は露臺にも

正面西側本家茶屋階段下に御座います。文樂座指定の均タクが新車を揃えて玄關にお待してあります。爽やかな休憩所が御座ります。

四ツ橋

文樂座

前賣切符専用電話南四七二二番

電話南 三七八八番

昭和五年六月卅日印刷
昭和五年七月一日發行

大坂・四ツ橋
調剤兼
行人入 大塚 頁三

大坂市西區土佐堀通一丁目
印刷者 永井太三郎

大坂市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

◇文樂座御ひるき名簿募集◇

一、申込は必ず官製はがきの事。

一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい。

(御住所御芳名の他一切不要)

一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。

一、會費其他一切申受けません。

一、宛名は大坂市西區四ツ橋

文樂座編輯部宛の事。

文樂座の歴史が全部わかる唯一の文獻

「文樂今昔譚」 特價 金貳圓

美しいグラフィック趣味ある好評物月刊雑誌

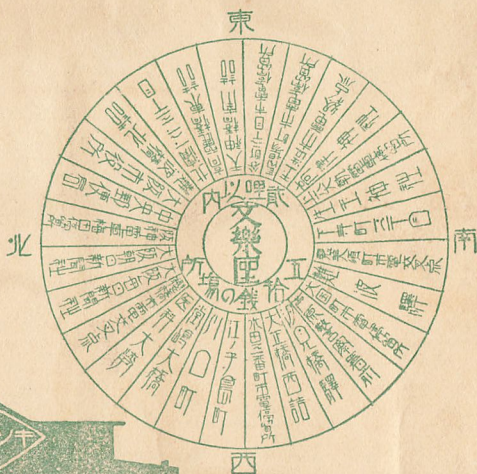
道 頓 堀 一部 金三十錢

美しい原色版歌度刷床しい文樂座の包装

文樂の繪葉書 二枚 金十五錢

お歸りは...

文樂座の七ツクワテ



純眞の美と氣品を増す

クラブ白粉

日ヤケアレ止に一番よい

クラブ美身クリーム

